
冷たい炎と月鏡

四方紅霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷たい炎と月鏡

【Zコード】

Z6782C

【作者名】

四方紅霞

【あらすじ】

ふと気づくと幽体となつて空に浮いていた青年は、不思議な出来事へと巻き込まれていく…。

第一話（前書き）

この作品はフィクションです。

第一話

「ワワワワと浮いていた。

それ以外に形容する言葉は無く。

空を見上げると星が広がり、眼下に見えるのは家々の明かり。真上から見ると、町ってこんな風に見えるのか… 何て考えていた。こんなに高いところにいるのに、星にはやっぱり手が届かない。

「そりや、そうだ」

声にだして俺は少し笑った。

ロマンチックな事を考えてどうするってんだ。

季節は冬のはずなのに実際、寒さは感じない。息を吐いてみても白くならなかつた。

「夢か…はたまた、幽体離脱か？」
「ほぼ正解」

耳元で声がして、俺は反射的に振り向いた。

「やあ」

そこには黒いながらも光つている猫がいた。

「現在、お前さんは己の意志に反し魂となつて体外離脱中。たいがいりだつちゅう元に戻りたかつたら、おいらに付いて来て」

「付いて行きたいのは山々だけど、ワワワワして思つようにな動かないんだけどね」

「ええ？ 仕方ないなあ…」

黒猫は人間くさくため息をつくと、俺の服の襟えりをくわえて引っ張つた。

「魂でも服着てんだ…」

俺のつぶやきに、黒猫は一回引っ張るのを止めて咥えていた襟を離す。

「変なことに気付く奴だなあ。魂つていっても色々種類があんのさ。体外離脱する魂つてのは大抵服着てるよ。もちろん、お前さんが裸

を想像すれば裸になるかも……でも今はやめておくれよ？ 髪の毛
引っ張られたくなかったら

「それは……嫌だな……」

想像しそうになつて、慌ててバタバタと体を動かした。危ない危
ない。

黒猫は再び襟を咥えて、俺の身体を下へ下へと引っ張つていった。

「レスキュー隊に助けられた人の気分」

「何言つてんだ。ほら、着いたよ」

俺の身体はまだフワフワと浮いていたが、辺りを見回すとそこは
公園だった。

すべり台なんかはあるけど、ジャングルジムがない。

「ご苦労様、助かつたよ」

もう一人の声がして、浮いたままの俺は顔を動かしてその声の主
を見た。

「空を飛ぶのは好きじゃないのに、ごめんね」

「青空あおぞらが飛べないんじゃ仕方ないよ」

青空？

俺が首を傾げると、黒猫に話しかけていた黒い服を着た少年が慌
てたように、俺の胸元に銀色のシールを貼り付ける。その途端に俺
は地面に落ちた。

第一話

「わっ」

背中を打つて痛みのあまり地面を転げ回る俺を、助ける様子もなく少年と猫はただ見ている。

「痛いじゃないか！」

「何で？」

「何でっ……て、急に落ちたから背中打ったんだぞ」

黒猫と少年は顔を見合せた。

「幽体ゆうたいなのに？」

「はっ？」

俺は起き上がりつて背中を触つてみた。驚いたことに痛みが無くなっている。

「えっ……あれ？」

「凄い想像力だね……」

「へええ、初めてだなあ、想像で痛がる奴」

何だか恥ずかしくなつて、俺は立ち上がつた。砂や埃は付いていなかつたけど、何となく服のほこりを払うふりをして恥ずかしさを誤魔化す。

「えつと、確認したいんですけど。あなたは三刀屋みとや 鐗樹じゅうきさんですよね？」

黒い服の少年は微笑んでそう言った。

「何とまあ、無防備な笑顔。

「ああ、そうだけど」

ふと黒猫を見下ろすと、もう光つてはいなかつた。俺を見上げてにゃーと鳴く。

「時間がありますので、手短に話させていただきます。まず、僕は青空あおぞらと申します。こつちは大治郎だいじろうです。以後よろしくお願ひします」

す

「は、はあ」

「実は、貴方が戻るべき魂の器うつわが、故意に隠されてしまいました」「はああ？」

黒い服の少年青空は、手に持った最小のノートパソコンをパタンと閉じた。俺が欲しいと思つてたのと同じ型。

「こちらとしても色々手を尽くして搜したのですが、見つかりませんでした」

「なあ？ 青空。こちらさんはさつぱり理解してないようだけど」

黒猫の大治郎が青空の足を軽く引っかけてそう言つ。

「えつと…すいません。つまりその、貴方の身体あなたからだが消えてしまったんです」

思わず煙に包まれて消える自分の体を想像してしまった。

「消えてしまつた…って。別の場所に移動したんじゃなくて？」

「移動しただけなら、すぐに見つけられます。幽体ゆうたいというのは自分の体がどこにあるのか、無意識に感知するはずなんです。でも、貴方の場合には無理やり体外離脱たいがいだつさせられた上に、一週間もそのままです。鬼籍きせきにも載つていないので死んでいることは無いのですが、しかしこのままだと戻れなくなり…」

「そのうち鬼籍に入っちゃうんだねえ」

大治郎がそう言つて、目を細めた。

「させき…って何？」

「新聞のおくやみ欄らんみたいなもん」

「こら、大治郎！ えつと…その死者の名簿しやだんです」

「このまだと死ぬつてこと…？」

「はい…」

何とも実感の湧かない死亡告知。

「故意に隠された…ってどういうこと？」

「幽体と器は氣で繋がっています。それを途中で遮断しゃだんされてしまつたため、見つからないのです。ただ、遮断されているとはいえ、断ち切られてしまつたわけではないので、生きています。たぶん、そ

の身体を生かしておく必要があるからだと思われるのですが、
言いにくいのですが…と前置きして、青空はノートパソコンをも
う一度開く。

「今までの報告例からしますと見つかった器はゼロです」
「気が見つからないことには、おいら達もお手上げなんだよ」
「」のまま、黙つて死ねつていつのか…？」

ゼロ。
零。それは無。

俺は踵を返して公園を出ようとした。

「待つてください！ 何処へ行くんですか」

「身体捜しに行くに決まつてんだろ？」「

「そのシールは一日しか持たない代物だから、また身体が浮いちゃ
つて、それどころじゃ無くなるつてば」
むつとして大治郎を睨むと、黒猫は一イチと口の端を上げて笑つ

た。
「慌てなさんなつて。これから一つ提案てごあんをしたいと思つてゐるんだよ

ねえ」

第二話

「提案？」

「あのう…僕らじや見つけられないんですけど…もしかしたら貴方自身なら見つけられるかもしないんです」

「本当か！？」

「その…あの…でも、幽体のままじゃ無理なので…」

「ひとつ、おいら達が器を用意しようじゃないかって話」

青空はパソコンに何か打つと、俺に向かって画面を見せた。

「船迫 要」という高校一年生の少年です

「（）いつの魂は？」

「いいとこ気付いたねえ…要つちの魂は封印されてるんだなあ…これが」

「封印？」

「封印じゃないよ…大治郎。えっと、特別にアルバイトを…」

「は？」

「封印って言つても嘘じゃないだろ？）。要つちは青空の同僚を助けたお礼として、一年間だけ一緒にそいつと行動を共にする願つて、魂のままだと戻れなくなっちゃうからおいらのよつた動物に封印されてるのさ」

「なので、この身体を使える期間はあと十一ヶ月」「週間と一日です」「頭の中にクエスチョンマークが沢山並ぶ。

「大治郎も、封印されてるわけ？」

「ああ、呼び捨て…まあいいけど。一応、お前さんより年上なんだよ？」

大きくため息をついた後、上田遣いで俺を見た。

「おいらの場合はちょっと特別な理由で自分から封印されたんだ」

「その後の質問は、時間が無いので今度にしてください。病院に案内します」

「……近いのか？」

俺の言葉に青空は大治郎を見る。

「二人は無理かな？」

「ううーん…シール外せば何とかなるかな」

「よし、行こう」

うなづいて青空が一本の指を大治郎の額に当てた途端に、黒い体が光り始めた。シールが外されて、俺の身体が浮きあがる。

「青空！ しつかり捕まつとけよー」

青空は左手で大治郎の尻尾^{しつぽ}を捕まえると、右手で俺の襟首^{えりくび}を捕まる。

「何でいつも襟首なんだよつ

「それーつ」

一気に引っ張られて首が絞まる。

「ぐ、苦しい… って」

「もう着きました」

再びシールが貼られて病院の床に下りた。

「本当に貴方は想像豊かな方ですね」

「一瞬で、着いてんだけどねえ」

顔熱い。青空の笑顔が逆に嫌味に見えるのは俺の心が荒んでいるせいいか？

俺は右手で顔を扇^{あお}ぎながら俯いてしまった。

「さあ、急ぎましょ。朝までに入ってしまわないと」

閉まつたままのドアをすり抜けて（本当に通り抜けた！）病室に入り、俺が入ることになる身体を見つけた。

第四話

「(主人公)、個室じゃないか……うわあ金持ち……」

「変な感動しないでください。それより、彼の身体を借りるための注意事項です。まず、彼は高校一年生ですから未成年だつてこと忘れないで下さいね。タバコやお酒はダメですよ」

「えーっ……ダメ?」

「今まで我慢できるとか。

「ダメです。それから、高校に通つてもうつことになるかもしません」

「ちょっと、待てよ」

「彼は高校生です」

「分かつてるけど、俺の身体を捲さなきゃならないだらう?」「…

「もちろんです。でも、高校生の彼が昼間からうろうろしていたらどうなります?」これも条件のうちです

「遠くにあつたら見つからないじゃないか!」

青空はパソコンの画面を俺に見せる。

「いいですか、(主人公)が唯一感知できた気の最後の場所です。(主人公)までなら気を辿ることができます。(主人公)の気の範囲を考えると非常に近くにあると思われるんです」

「(主人公)、学校じゃないか」

「はい、丁度彼が通つている学園の中庭です」

「分かつたよ……でも学校以外は好きにさせてもらひながらな

「彼の自宅にはなるべく帰つてください」

そう言つて青空はベッドの脇にあるテーブルに折りたたんだ紙を置く。

「これは彼の行動範囲の地図です。忘れずに持つて行つてくださいね

「青空、太陽が昇るよ

「うん、わかってる」

青空は器の身体を横向きに動かした。点滴をしてるためうつ伏せにはできないからしかった。

「それじゃあ、彼の背中に手を当ててください……シール外しますよ！」

「えっ」

待ってくれという間もなくシールが外された途端に、ガクンと身体が揺れる。

「気持ち悪い……」

耳慣れない声が聞こえてきて、俺は瞼を開けた。

どうやら上手くいったらしい。

吐きそうになつて身体を仰向けに戻そうとした時、看護士と目が合つた。

「せつ先生！」

バタバタと足音を立てて看護士（女）は走つていった。

病院つて走っちゃダメなんじゃなかつたつけ？あれ学校か…？カーテンが開いていたため、窓から太陽の光りが見えた。あいにく建物の影で太陽自体は見えなかつたけど。

点滴が邪魔で、思うように動けない。それに何だか体中の力が出なかつた。フワフワしてる。そのうえグルグルで時々グワングワンだ。

「同じじゃないか……」

飛んでる方が良かつたような……なんて考えていると、数人の足音が近づいてきた。

「君の目の錯覚じゃないだろうね」

「違います、確かに目を開けていました！」

数人が走り寄つてきて、俺の顔を覗き込む。

「ああっ、気付いたんだね！」

大きな声を上げるので、頭がガンガン痛くなる。吐き気も強くなつてきた。

「言い忘れてたけど、拒否反応で頭痛だいじゆうと吐き気がするから」
声の方に視線をやると、青空が大治郎の尻尾しつぽにつかまつたまま空中
中に浮かんで窓の外にいた。

「あ……」

おぞら……と言おうとするが、口の前に人差し指を持つてくる。
「あなた以外には見えていないし聞こえていないですよ……明日になれば治ると思います。それじゃあ、」
そのまま上に上がって行くのかと思ったら、風船が萎んで行くよう下へ下へとゆっくり降りていった。

「ちょっと、失礼」

そう言つて医者（白衣を着てゐるから…たぶん）が俺の…といふ
か船迫 要の腕をとつて脈を調べる。

さつきの看護士が血圧計を持ってきて計り、体温計を腕に挟むよ
うに言われた。

「具合はどうだい？」

「頭痛と吐き気が…」

「ううーん、血圧も正常、体温も…うん大丈夫だね。君、あれを持
つてきてくれないか」

「はい」

あれ、と言われて看護士が持つてきたのはそんなに深くない銀色
の容器だった。

「どうしても気持ち悪くなつたら、これに吐きなさい。君、船迫さ
んには連絡をいれたんだろうね？」

「はい、すぐにいらつしやるそうです」

医者は大きく頷いて、腕時計を見る。

「色々検査をしなくちゃならないから、また後で会おう」

そう言つて、頭痛と吐き気には何の対処もないまま立ち去つた。

「ちょっと…」

引きとめようとして吐き気が襲い、仕方なく俺はベッドに横にな
つた。

横向きにならうが仰向けにならうが気持ち悪さは治らず、何度も
身体の向きを変える。うつ伏せになつてみよつか…なんて考え始め
た頃、病室のドアがいきなり開いた。

看護士がベッドの周りのカーテンを開いて行つたので、入つてき
た人と目がばつちりと合つてしまつた。

第一印象、ケバい。もとい、派手な格好。

いや、本当に病院にくる格好かよって感じ。

印象が悪かったので、俺の言葉もぞんざいになる。格好だけで判断するのは好きじゃないけど、何しろ吐き気と頭痛で機嫌が悪い。タイミングが悪かったと思って欲しい。などと思いつつ、俺は睨みながら言ってしまった。

「あんた誰？ ノックもなしで入つてこないでくれる？」

途端にその人物、派手な女性は一瞬、驚いた顔をした後、ベッドの横にあるソファーに泣き崩れてしまった。

つつーか、誰？

いらっしゃいると（俺から質問するつもりは毛頭ない）看護士が慌てた様に、その女に駆け寄つて身体を支えていた。

「看護士さん、その人誰？」

看護士も驚いたように俺を見て、さうに女を見る。

「お母様…ですよね？」

看護士が確認するよう言つた。

「お・か・あ・さ・ま？」

がばつと身体を起こして女…もとい、お母様は看護士に詰め寄つた。

「どういひとですのつー？」

「い、いえ。私にも何が何だか…」

どうやらこの女が船迫要の母親らしい。青空も家族の写真ぐらいい見せておけつて。初っ端から失敗しちゃつたじゃないか…。まさか要もお母様なんて呼んでいたわけじゃないだろうなあ。ママか？ いや、俺のガラジやない。

母さん？ お母さん？

俺が無言で考へていると、少し落ち着いた母親が俺の顔を覗き込んだ。

「要…お母さんのこと忘れてやつたの？」

「えつと、忘れてないよお母さん」

その途端にまた、わっと泣き出してしまつた。

何なんだよ…まったく。

こつちは頭痛と吐き氣で大変な^に。俺はため息をついて布団を被つた。

「要！」

「いい加減にしてくれよ！ 頭痛いんだよ！」

「お母様、一旦こちらへ」

看護士が病室から要の母親を連れ出してくれたおかげで、頭の痛みが少しだけ和らいだ。

布団を被つたせいで、眩暈まで起こしてしまい俺は目を閉じる。こんなところでのんびりしている暇はないのに、満足に身体も動かせないときた。

「要くん大丈夫？」

看護士が戻ってきて、小さな声でそう聞いていた。

「頭痛と吐き氣がひどいです」

「そう……ねえ、本当にお母様のことわからないの？」

俺は布団をゆっくり元に戻して顔を出した。

「さつき、何で泣いたかわかりますか？」

「あのね。要くんはいつも、ママって呼んでいたみたいよ」

お母さんのこと忘れちゃったの？ つていうから、てっきりお母さんって呼んでいると思っちゃつたんだけどなあ。

深くため息をついて、俺は点滴を見上げた。

「点滴、いつ終わります?」

「検査が終わる頃には外せると思つわ。朝食は出ないけど、お皿から重湯おもゆが出るとおもうから」

「重湯?」

「それがヨーグルトかな? ちょっとわからないけど急に胃に入れたりしちゃダメなのよ。少しづつ元の食事に戻るから我慢がまんしてね」

看護士はニッコリと笑つて病室を出て行つた。

腹が減つしじぶんているわけではないけど、ダメだと言われると逆らいたくなる性分。

「…でも今、固形物食べたら絶対吐くよな…」

というわけで断念して、重湯で我慢することにした。

何とか喉を通つて胃に納まる。

さつきより吐き気は治まつてきたから、激しく動かない限りは丈夫だらうと、素人判断しろうとはんだん。

壁にかかつっていた時計を見ると、もうすぐ八時になるとひだつた。

どうせ検査はまだだらうから、眠つておこう。

そう思つて俺が目を閉じた途端に、ノックの音がして、医者と船ふな迫のお母様が入ってきた。

「要くん!」

仕方なく目を開けると、医者がものすごく慌あわてた様子で椅子に腰掛けた。

さすがに、やつを会つた時より顔色悪い感じかも。

「お父さんの名前は分かるかい?」

俺は無言で返す。

だつて青空のやつ何も言わなかつたじやないか。

船迫 要つていう名前以外、ほとんど聞いてないぞ。

「生年月日は？」

高校一年生だったつけ。

「住所は？」

んなもん知るか。

そういうえば、青空が置いていった地図があるけど、今ここで開く
わけにはいかないしなあ。

「記憶喪失ですか！？」

ママって呼ばなくともいいかな…。ガラジやないんだつて。
誰が何と言おうと、お袋ふくろだよなあ。せめてお母さんか…。
兎かくに角かく、ここではお袋ふくろといつこにする。が、そう喚いた。

「一時的なものだと思われるのですが…」

俺が要の身体に入つてゐる限りは、ずっとです。

何だか可笑しなつてきて、顔がにやけてくる。

俺は身体を横にして肩を震わせた。笑つてゐるのを誤魔化すためだつたけど、医者とお袋はそう思わなかつたらしく、憐れんだ様子で医者が俺の肩を優しく叩いた。

「大丈夫。すぐ思い出せるわ。君が思いつめる必要はないんだよ」

涙出そう。

お袋の心中を察すると笑い事じやないんだろうけど、事情を知つてゐる俺にしてみれば滑稽な話だ。

あんたの可愛い息子の中身は、まったくの別人ですつて言つたら、どんな顔するんだろう。

まあ、まず信じないよな。

不謹慎な奴だらうけど、そもそも本物は自分で出て行つたんだから、文句は本人に言つて欲しい。

何とか笑いを押さえ、俺は仰向けになつて重々しく頷いて見せた。

「お母さんも、無理やり思ひ出させるようなことは慎んでください」「はい、分かりました」

ハンカチを持ったまま、お袋がそう言つて頷く。

検査がそれから一日ぐらい続いて、退院できたのは一週間後。

もちろん記憶が戻るわけがなく（何てつたつて中身はこの俺だからね）、通院することとなつたが、何とか病院を出ることはできた。この一週間で俺が知つたことと言えば、要は一人っ子だつてこと、親父の仕事は医者だつてこと。それから要も医者を田指していること。

気づいたことと言えば、お袋以外誰も見舞いに来ないことかな？

俺は誰もいない時に、青空からもらつた地図を眺めた。

自宅から学校の位置、塾の場所など描かれている。
「塾？ そんなトコに行つてられるかよ」

トントンと軽いノックの音がして、お袋が入ってきた。

何げない様子で地図をしまって、時計を見る。

時刻は午前七時半。

「要。本当に今日から学校に行くの？ 少し休んでからでいいのよ？」

「いいよ。勉強遅れたら嫌だし」

そう言い訳をして、俺は制服に袖を通した。

懐かしい感じ。制服着てたのは何年前のことだったつけ。

朝食はすでに済ませてあるので、お袋に持ってきてもらった鞄を受け取り病室を出た。

「こんなに早く学校に行くの？」

廊下を歩いている俺の後ろを歩きながら、お袋は心配そうに小さな声で聞いてくる。

「だつてここから歩いていつたら、三十分くらいかかるだろ？」

「歩いて？ 何を言っているの、退院したばかりなのに！」

立ち止まって大きな声でお袋が言ったので、廊下にいた人のほとんどが俺たちを見る。

気にせずに歩いている俺の後を、お袋は慌てて追いかけて来た。

「身体が鈍ってるから、歩いていくよ」

お袋の反応を待たずに、俺は病院を急いで出る。

駐車場を出たところで何となく振り返って見ると、まだ玄関に立つていてこちらをみつめていた。

そりや、心配だよなあ……これからもっと心配かけるかもしれないと思つと、ひょっと申し訳なく思つ。

溜息をついた後、深呼吸すると空気が冷たい。息が白い……。何か上に羽織つてくれれば良かつた。

空を見上げると快晴。それにしても、やっぱり寒い。

身体を慣らすようにゆっくりと歩きながら辺りの風景を見ると、青空から貰つた地図が頭に浮かぶ。

「なるほど

地図の通りに公園を通り過ぎて商店街を抜け、けつこいつ急な坂道を登る。

「要くん！ 退院後の身体にはきつくない？」

後ろからそう声をかけられて、立ち止まり振り返ると、緑色のマフラーを巻いた見知らぬ生徒が立っていた。

「えつと…誰だけ？ ゴメン俺、記憶がないんだ」

そう言うとその生徒は一瞬、困った顔をしたけど、その後すぐに

「ゴミ」と微笑んだ。

「そうなんだ…。僕、鳶沢勇氣とびさわ ゆうき。君と同じクラスだよ。良かった、元気そうで。お見舞いに行けなくてごめんね」

「ああ…別にいいよ」

「えつとね…知らないだろうから言つておくけど、僕は君のお母さんに入られてないんだ。だから、病室の前まで行つた事はあつたんだけど…」

俺は意味が飲み込めずに首を傾げた。

「気に入られてない…？」

「あー、えつと。その。僕が地方公務員の息子だから」

「はあ…？ 地方公務員の何が悪い？」

鳶沢は目を丸くする。

その様子が何とも可愛かった。

本人はそう言われても嬉しくないかもしれないけど。

「う、うん。僕もわかんないけど。その…上流階級の人と付き合ふつて言われてるみたい」

第九話

「上流階級？ はあ？ わけわかんねえ。で、俺はその言葉に従つてたわけ？」

「え、いや。その表向きは……」

一応、逆らつてたわけだ。

「そつか。ま、今日からよろしく……色々と教えてくれよな」

「……要くん……隨分と……変わったね」

「まあね……悪いけど鞆もつてくれるか？」

「ああ、うん。いいよ」

よし、これで鞆持ちゲット！（いや、もちろん冗談だけど）と内心喜んでいると、いきなり真横に大きな黒塗りの高級車が止まった。「うわあ……高そうな車」

ちょっとだけ感動していると、後部座席の窓が開く。

「やあ、船迫くんじゃないか。退院したんだね、おめでとう」

「……えつと。鳶沢。こいつ誰？」

「ひつ、こいつ？」

ギラリと俺を睨みつけて名前も名乗らないそいつは、鳶沢と俺を交互に見た後、鼻で笑つた。

「そんな態度でいいのかな？ 船迫 要くん」

名前のところをゆっくりと強調して言つ。

何となくいけ好かない奴。

「悪いけど、俺、記憶喪失でね。お前が誰なのかわからない」

「おやおや。それじゃあ僕の車に乗つて行かないかい？ 学校まで色々と教えてやるよ」

いついう奴つて本の中だけだと思つてたけど、本当にいるんだなあ。一々腹が立つ奴。

大人気ないけど、思わず言い返してしまつ。

「つづーか。お前の車じゃなくて、お前の親の車だろつが」

俺はそいつを見下ろす様に（車に乗っているから、自然とだけ）
睨みつけた。

睨むことなら得意だ。

「なつ、何だつて！ これは僕専用で！ 僕の……」

一瞬怯んだあと、慌てたように言ったので最後まで言わせないよう口を挟む。

「専用だらうが何だらうが、お前はまだ免許持つてないだらうが。だったらお前の車じゃない」

「要くん… やめた方が…」

鳶沢が止めるのも聞かずに、俺は歩き出した。鼻で笑つてやるのを忘れずに。

うん、ちょっと大人気ないかな？ でも、まあ今は船迫 要なんでいいかと考えた。

「要くん！」

鳶沢が慌てて追いかけてくる。

「いいの？ 彼と争うと後で面倒だよ」

「あんな奴と一緒にいるほうが面倒だ。なあ、鳶沢。もしかして、あんな奴ばっかりなのか？ 学校は」

「え、ええと。そうでもないけど…」

車が俺たちを追い越して行つたが、その瞬間に小さく「覚えてろよ」と聞こえた。

「かつ要くーん… ビリビリビーしょー…」

「何が?」

「何がつて…」

「行こうぜ。遅れる」

「要くん… 君… 本当に変わったね」

田を丸くしながら薦沢が言つたので、俺は笑い出すのを堪えながら歩き続ける。

「ところで、あいつは誰

「ああ… 彼は箱柳 修。君のお母さんが付き合ひよって、言つてた一人かな」

「あんなのと?」

俺の言葉にとつとつ薦沢は笑い出す。一頬り笑つた後、涙を指で拭きつつ何とか笑いを治めた。

「う、うん。箱柳君のお父さんが代議士だから

「何だか俺のお袋もヘンなこと言つよなあ。あのが上流階級の人間か?」

「箱柳君のお父さんは立派な人だよ?」

「親の背中を見て育たなかつたんだなあ……あ! もしかしてさ、あいつの母親も俺のお袋みたいな奴なんじゃないの?」

薦沢は苦笑いして、答えなかつた。

「ま、いつか。で、この話の流れから行くと、俺はいじめられるのかな?」

「随分… うれしそうに言つね」「うれしそうに言つね」

俺の満面の笑みを見て、薦沢は不思議そうに田を瞬かせる。

「ほら、校舎裏に来いとか。あると思う?」

「さ、まあ… 分からないけど…」

呼び出された時のことを考えてにんまりと笑つてしまつ。

楽しみ楽しみ。

「何だか…要くんワイルドになつたね…」

「ワイルドお？ ふーん…これでワイルドって事は要は相当おとなしい奴なんだな…」

「え？」

「あ！ いいや何でもない…急げ！」

もうそろそろ学校に着くはずだったから、ちょっとワクワクして

急いだ。

急な坂が終わって、緩やかな坂に変わる。それを登つて（緩やかつていうのが意外と辛い）ようやく校門に着いた。

「鳶沢。鞆、サンキューな。もういいよ」

「あ、うん」

鳶沢から鞆を受け取つて学校敷地に一步足を踏み入れた途端に、ものすごい重力のようなものを感じて、俺はその場に膝ひざをついた。

第十一話

「だつ 大丈夫？ 要くん！」

「何だ… これ」

「ど、どうしたの？ 誰か呼んでこようつか？」

立ち上がらない。立ち上がられないどころか、そのままだと地面に突っ伏してしまいそうな感じ。

ヤバイ。

かなりヤバイ。

「こんなところで、何やつてんの？」

後ろから声がかけられたが、振り返られないし声も出なかつた。

「あつ、八潮路くん」

「あれ？ もしかして船迫？」

八潮路と呼ばれたそいつは、おれの右腕を掴まえて引っ張りながら立ち上がらせてくれる。有難い。

ふつと身体が軽くなつて、俺は振り返つた。

「サンキュー。助かつた」

「ん…」

かなり驚いた様子で、そいつが俺を見つめてるのに気づいたのか、
鳶沢が慌てた様に喋りだした。

「あ、あのね。要くん記憶喪失なんだつて、ほら何週間か入院してたでしよう？ それで、えつと」

「記憶喪失？」

「うん、まあね。ここで名前教えてもらえる？ 全然覚えてないもんで」

「オレは八潮路都雅。同じクラス」

そう言つて右手を出してきた。握手を交わして俺は八潮路を見上げた。

俺よりも背が高い。

髪が要や鳶沢と違つて染められていて、ミルクティーの様な色だった。

鳶沢と見比べると、ものすゞく正反対な感じ。

鳶沢は随分と可愛いイメージだし真面目っぽい。それに対して、八潮路はずつと大人っぽいけど、何ていうか上手くつかめない感じ。どちらかといえば硬派に近いかな。でもトゲトゲしていなくて飄々（ひょうひょう）としている。

やっぱり制服は着崩してるし、何となく昔の自分を思い出して親近感が湧いた。

「そつか、んじゃ友達になつてくれない？　どうせ前の友達覚えて無いし」

「友達……」

鳶沢が今まで以上に目をまん丸にして、口を大きくあんぐりと開けた。

「か、要くん……ぼ、僕びっくり……」

「あ？」

鳶沢の方に顔を向けると、目を瞬かせている。

顔の向きを元に戻すと、八潮路は考え込むようにして、眉を寄せていた。

「オレでいいのかな？ 知らないだろ？ から言つておくけど、オレは結構アウトローでアウトサイダーなわけで」

腕を組みながら八潮路はそう言つて、俺の答えを待つていた。

第十一話

「OK、OK! そつちの方が俺としては有難い感じだね」
「そう? そうか… それじゃ、よろしく」

「うひちこそ、よろしく」

再び握手をして、思い出したよつて鳶沢を見ると、固まっていた。

「鳶沢… 大丈夫か?」

「う、うん…」

ふうと息を吐いて、鳶沢は目を瞬かせる。

「世紀の一瞬をみた気分だよ」

「大げさだなあ」

「だつて、皆もびっくりすると思つよ。優等生の要くんとその… あの…」

鳶沢が言い淀んでいるのを察した八潮路が、小さく笑った。
「優等生からは反比例のオレが友達になつたから… かな」
おお、反比例とはおもしろい表現。

「あ、あの…」めん…

「いいよ」

八潮路にやせしき言われて鳶沢は『ぐくんと唾を飲み込んだ。

「今日は… 驚くことばっかりだよ… 要くん」

何故そんなに驚いてるのかは分からないが、ビックやら以前の要は八潮路と仲良くしていなかつたみたいだな。

驚いている勇気をほつておいて、都雅の方を向いて俺は笑つて見せた。

「つてなわけで、都雅つて呼んでもいいか?」

「ん、いいよ。それじゃ、オレも要つて呼ばせてもらひ。といひで、
身体は大丈夫か? なんだつたら負ぶつてやろうか」

「いいや、大丈夫。教室まで案内してよ」

「わかった」

「あ、待つてよ。置いていかないでー！」

歩き出した俺たちの後を、慌てた様に鳶沢が追いかけてくる。

「そういえば、鳶沢は俺のこと要つて呼ぶんだな

「あ、うん。ダメだつたかな…以前からそう呼んでいたから」

「別にいいけど……俺は何て呼んでた？」

卷之二

「勇気でいいだろ」

「あ、うん。いいよ」

歩きながら、俺と都雅の丁度中間の、後ろを歩いている勇気の方

何遠慮して歩いてるんだ？ 隣り来いよ」

「狭い歩道じゃないんだから、いいだろ？」

なあ？ と躊躇にいはる都雅に同意を求めるが、都雅は小さく笑つ

た。

鳴沢は距離を測りかねてるんだろ？

「距離？」
勇気は慌てた様に、首を横に振り両手を上げながら左右に振る。

「九月違」

その慌てぶりに

「あー、悪い。急に変わった俺に付いて行け

仕方ないか」

違つたら

「勇気くんだって、もとの要と同じ様に優等生だつたんだらうへ？」
そう俺が言つて、勇氣は床にこなつて、さう。

豈うつてば！

通鑑

勇気が泣き声混じりでそう言った時、俺の隣で都雅が再び小さく笑つた。

「それ以上、苛めるのはやめなよ」

「苛めてないって」

「オレが言つた距離つてのは、君とのじやなくて、オレとの距離つてことだよ」

「都雅との？」

都雅の顔を見ると、深く頷いた。

「約一年間同じクラスだったけど、ほとんど喋つたことないし。小等部の時からアウトロー的なところがあったからね。まあ、触らぬ神に祟りなしつていうだろ？　あいにくオレは神じゃないけど」ふむふむ…と納得しつつ、最初の言葉に引っかかりをおぼえて、俺は首を傾げた。

第十二話

「約一年間…つて。え？ 僕たち高校一年生だよな？ 去年の話？」
中等部と高等部と一緒に言づか？ あれ？と思いつつ一人の顔を見つめた。

俺の言葉に都雅とがと勇気が顔を見合させる。

「もしかして全部忘れちゃったの？」

「……つてことは高一じゃない…？」

「まあ…間違つてはいないかな。今年の春から高等部だから」

青空の奴…きちんと説明して行けよ！ 高校一年つて言つてたじやないかっ！

次にあつたら、絶対文句いつてやる。

溜息をついて、俺は二人に説明を求めることにした。

「悪い…説明してくれないか」

「うん。ええと、まず僕達は今、中等部三年生です。この学校は小等部から高等部の一貫教育男子高校なんだよ。あ、ちなみに学年末試験は終わってるからね」

勇気の言葉に俺はホッとした。試験は受けなくてすんだなら、何とかなりそうだ。

「後、二ヶ月ちょっとで高等部の校舎に移動だけど…もしかして現在の日時を把握していないということかな？」

都雅が口の端を少しだけ上げて笑いながらそう言った。

「……後二ヶ月ちょいでつてことは…今、二月だよな…え、何でこんなに寒いんだ？」

俺の言葉は相当、変に聞こえたらしい。目を丸くした後、都雅と勇気は再び顔を見合せた。

「二月つて寒いでしょう？」

「寒いけど…でも寒すぎないか？」

そう言つと、立ち止まつた都雅がいきなり鞄から地図帳を取り出

して、開いて見せた。

俺と勇氣も立ち止まつて地図帳をのぞく。俺が使ってた（いや、当時あんまり使ってなかつたか…）地図帳より綺麗で見やすくなつてゐる。

「オレ達の住んでるのはこい」

都雅が指したその場所は、俺（三刀屋 鋼樹）が住んでいた場所から遙か遠い北に位置していた。

「……え…マジ？」

都雅と勇氣は真面目な顔で頷いた。

「引っ越ししてきた…とか？」

「要くんは生まれも育ちもここだつて聞いてるけど」

唖然としている俺を見て、都雅は地図を閉じて鞄にしまつ。

「本当に覚えてないんだな…」

「ちよつと待て…なら、なんで都雅も勇氣もコート着てないんだよ？」

「今日はいつもより暖かいんだよ？」

暖かいといつ言葉に驚いて、俺は身震いする。

「これで？」

「昨日は平年の気温だつたからコート着てたよ。でも、今日は二月下旬くらいの気温だつて、天気予報で言つてた」

「この寒さで二月の気温？」

「明日から天気が崩れるつて言つてたから、また寒くなるよ

「かあーっ！…何でお袋はコートくれなかつたんだよ？…」

都雅は俺の様子に、シニカルに笑つた。

「車で送るつもりだつたからだろ」

「うわーっ…失敗したつ」

「後悔先に立たず…」

「勇氣も都雅も、寒さを我慢してゐるのかと思つてたの…」

「いくらオレでも、寒かつたらコート着るよ」

「何でだか分からぬけど…なんとなく敗北感。

同じ日本なのに、何なんだこの気温差は！」

「箱柳くんの車に誘われた時、乗つていれば良かつたのに」

勇気がそう言つたので、俺はむつとして早足で歩き出した。

「要くん！ 怒つたの？」

「当たり前だろ。あんな奴の車、猛吹雪の日だつて乗るもんか」
都雅と勇気が後ろから付いて来る。振り返ると二人は並んで歩いていた。箱柳と俺のやりとりを、勇気が都雅に説明している。何だ、もう慣れたのか。

「以前の要くんなら乗つてたよね」

などと言つるので、勇気の首に腕を回して力を入れた。

「わっ… 苦つ苦しい… つ」

「変なこと言つからだつ」

力を抜いて腕を解くと、勇気は都雅の後ろに隠れた。

「本當なんだつてば… 前の要くんはそつだつたんだよう

田を潤ませて泣きそうになりながら勇気は反論する（ただし都雅の後ろに隠れたまま）。

「そつなのかな？」

都雅に聞くと、黙つて頷いた。

「仲がいい… という訳じやないけど、いつも同じグループにいた…

といふか、いるようにしてた… かな」

「ふうん… 何で？」

都雅は後ろに隠れている勇気を自分の前に引つ張つて来て、両肩をポンと軽く叩く。

「えつ、えーつ僕が言つのーつ？」

俺は両手を腰に当てて勇気の言葉を待つていたが、あまりの寒さにくしゃみが出てしまった。

「はっ… くしゃみ… うー、寒い」

「ど、兎に角。中に入らうよ、ね、ね？」

「うう… 仕方ない」

第十四話

生徒玄関に入ると、外とは比べ物にならない程、暖かかった。

「うわー…天国…」

都雅と勇氣は俺の言葉に苦笑した。

「教室の方が暖かいよ…まあ…ある意味暑いかも」

「暑い？」

「うん…ヒーターの真横だと暑すぎて窓開けちゃう時あるよ。反対に廊下側だと寒いんだ」

「へえ…」

上履きに履き替えて、階段を上る。

「教室は一階なんだ。……何だか転校生を案内している気分だね」「ま、似たようなもんだよな…俺にしてみれば初めて来るわけだし三年生の階に付いて、真向かいのクラスが六組。

「何組あるの?」

「八組あるよ。僕らは一組。一組はね、成績優秀じゃないと入れない組なんだよ。二組以降はシャツフルなんだけど、一組は特別なんだ」

「……ってことは都雅も成績優秀なのか?」

「まあ…ね」

「うわ…反則…」

都雅は小さく笑った。

「反則つてなにさ」

「だつて、不良で成績優秀つて反則だろ?…番長か?」

「…古い、物言いだな…今時番長なんているのか?」

「いるかもしれないじゃないか…とは言わずには笑つて誤魔化す。

「オレみたいな奴は殆どいないよ。その点では結構珍しい学校だよな。でもそれよりもっと面倒なのがいるけど」

「面倒なの?」

「うだね」と勇気が深い溜息をついた。

「ま、要はオレの友達だから、何があつても助けるけどな」

都雅は白い歯を見せて笑つた。

「嬉しいこと言つてくれるじゃないか。サンキュー」

右手に折れて一組へと向かつ。

教室に入ると、すでに数名の生徒がいて、その中に箱柳もいた。

「何だ…あいつも同じクラスかよ…」

俺たちが入つてきても、無視している。

幼稚な奴。

入つてすぐの席（つまり廊下側の一一番後ろ）に都雅が座つた。

「オレの席は！」

「俺の席は？」

「要くんの席は、窓際の一一番後ろだよ」

「ああ…なるほど…。さっきのヒーターの説明は、そのためか…」

「うん」

勇気の席は真ん中の一番前…つまりは教壇のまん前だった。

第十五話

「すうじい席だな…」

「でも灯台下暗しで、何やつても意外と見つからないよ? たまに漫画読んでるけど、怒られたこと一度もないし」

可愛い顔して意外な奴。いや、顔は関係ないか…。

「授業中漫画読んで、成績優秀かよ…」

「あ、別に全部の授業で読んでるわけじゃないよ? ほら、立川先生の授業とかね」

「立川?」

「あ、ごめん。覚えてないんだったね。えっと歴史の先生。黒板に書くことって教科書と同じなんだもん。漫画読んでても支障はないよ。いい先生なんだけど…、授業はツママンナイんだ」

何となく想像できる授業風景…。懐かしさ満開だ。俺の場合、ほぼ全授業そだつたし。

ガム噛んでる奴いたし、弁当食つてるやつとか、携帯ゲームやつてるやつとか…。寝てるのが殆どだったような気がする。さすがにこのクラスには、そんな奴はいないだろつけど。それにしても、この空気の馴染め安さつたらない。もしかして俺、高校生から成長してない? 一応二十代なんだけどな…。

自分の席に鞄を置いて、都雅の席に遊びに行くと、勇氣も鞄を置いてこちらへ来る。

都雅の席の隣りの椅子を勝手に借りて座つた。勇氣は座らずに、黒板側に背を向けて机と机の間にある通路に立つている。

「都雅どがと話すの、慣れたか?」

「うん、今日は驚いてばっかりで、すっかり。こんなに普通に話せると思つてなかつたよ」

「ふうん…そんなに都雅は怖かったのか?」

「怖かつた…っていうか、八潮路やしおじくんは僕らに無関心つて感じだつ

たんだよ

都雅を見ると苦笑している。

「無関心？」

「そう、こんなに話す八潮路くんを見たのは、今日が初めてだからね。いつもは何が起きても、何もしなかったから」

「へー…いまいち分かりにくい…説明」

「『めん…えつとね…うーんと…。例えば、教室で誰かが倒れたとするよ?』

「凄い例えだな…まあいいか。それで?」

「教室には僕と八潮路くんしか他にいないで、倒れた人を助けなきやつて思うでしょ? でもそういう時、八潮路くんは決して助けてくれない。助けを呼んで来てもくれない…感じ…。えつと…大げさに言つとだけど…」

少し怯えた感じに言い終わって、勇気は恐る恐る、都雅を見る。

都雅は別に怒った様子も無く。

「大げさどころか、その通りだと思つよ」

と言つた。

「口も利かない事が多いしね。繋がりがなければ、オレにとつて塵じちも同然だから」

「うわ…うわー。凄い発言」

一人の会話に勇気は首を傾げた。

「えつと…それじゃあ、どうして僕と話をしてくれるの? 今まであまり話したことないのに」

「友達になつた要の、友達だから。要の友達は、オレの友達であると同義」

「うわー。んじゃ、校門こうもんで俺を助けた理由は?」

俺の質問に都雅は少し躊躇ちゅうちょした様子で、一瞬俺から目を逸らした。

「…借りがあつたから…」

「借り? 僕に?」

それ以上、都雅は何も言わなかつた。

「ふつん…ま、いつか。んじゃ、勇氣も友達なわけだから、都雅つて呼んでもいいんだな？」

「もちろん」

都雅は即答する。

「えつ…」

勇氣は一步後ろに下がった。

「都雅は勇氣つて呼ぶってことで、いいよな」「ん、いいよ」

これもまた即答。

「えつ…ええつ…」

勇氣はもう一步下がる。

「何だよ。嫌なのか？」

「そうじやないけど…いいの？ 本当に？」

ずいと接近した勇氣の勢いに、気圧された都雅が驚いたよつて返事をした。

「も、もちろんいいよ」

「うわー、嬉しいなあ…、名前で呼び合つたり、友達つて感じするよね。勉強を教えてもらつたりしたかつたんだ」

「へえ…都雅つて、そんなに頭いいの？」

「都雅くんはずーっと首席なんだ」

「首席？ ズット？ まさか…小等部か？」

「うん」

「首席…つまりは学年一位。」

「うわ…やつぱり反則だよ…都雅」

「……どんなルールだ、それは」

呆れたように都雅は笑つて、自分の前髪を引っ張る。

「こんな髪（ミルクティー色の髪）でいられるのは、その事があるからさ。さすがに学年首位の生徒を、追い出すわけにはいかないだろ？」「…」

「ははあ…へえ…」

感心しつつ横目で勇氣を見ると、なにやら一人でうつとつとしている（ちょっと怖い）。

第十六話

それでも、学年末試験けつこつ早いんだな。この学校「まあ… エスカレーター式だしね」

肩をすくめながら都雅が言う。

「結果は？ もうでてるのか？」

勇氣と都雅とがが、同時に無言で頷いた。

ちょっとどドキドキする。要の試験の結果はどうだったんだろう。

ちなみに、もう高等部のクラス分けも発表されてるよ

勇気の言葉に、俺は驚いて椅子から落ちそうになった。

「はあ？ いくらなんでも早すぎないか？」

「一応、仮のだけどね。他の学校に転学する人もいるから

「で… その…俺のは？」

「あ、えっと。ちょっと、待ってね」

勇気が一度自分の席に戻つて、鞄の中から折りたたんだ紙切れを持つてきた。

「ええと、要くんは学年七位。高等部でも同じクラスだよ」と、いつことは受かっているわけだ。エスカレーターだと分かっていても、試験と聞くと恐怖が思い起こされる。

「そ、そとか…」

軽い脱力感。ホツとしていると、左側から声をかけられた。

「あ、あのー。船迫くん…、席変わつてあげようか？」

声のした方を見ると、少し怯えた風の生徒が立つていた。

「あ？ ああ。悪い。ここ、お前の席？」

「え… あ、うん。ただけど…」

勇気の方を振り返つて首を傾げて見せると、気づいて名前を教えてくれる。

「彼は江上くん。江上 宗也くんだよ」

「ふうん…そつか。悪いな、今、退けるから

「あ… いや、いいんだ。僕があつちに行くよ
「いや、でも悪いし」

「良いんだ、じゃ、じゃあ」

慌てた様に窓際の席へと行ってしまう。

「何だよ… 良いのか？ かつてに席変えて」

「構わないだろう。卒業まで間もない事だしね」

都雅がふわりと優しい顔でそう答えた。ふむ。男の俺から見ても
美形だし、こりゃ女にモテルだろうな… 羨ましい… などと、つい思
つてしまつた。いかんいかん。

「あ… 僕が鞄持つてきてあげるよ」

勇気が二ツ「ひとつ微笑んで窓際へと歩いて行く。

「おお… サンキュー。助かるよ」

勇気が窓際の席から、俺の鞄を持ってきてくれた。ほんと、気が
利く奴。

持つべきものは友だと、都合のいい解釈をしつつ。受け取った鞄
を、机の横のフックに掛けた。

とうとう始まりのベルが鳴る。

懐かしいその音が、自分の身体を捲す、始まりのベルでもあるの
かもしれない、そう思った。

第十七話

ホームルームが終わり、短い休み時間の後、授業が始まる。授業といつても、テストが返ってきて答え合わせだけだったけどなるほど。

学年七位になると、満点に近い点数だ。

つていうか……全然わからないんですけど……大丈夫か俺。かなり高校生活に不安を感じつつ、後で青空に聞いておこうと思つた時に、俺はようやく青空との連絡の取り方を知らない事に気付いた。

遅すぎるけど。

「……どーするんだ？」

「どうしたの？」

隣で都雅がクロスワードパズルの本を開いて、解きながら（何しろ満点だから答え合わせなんて必要ないわけだ）そう聞いてきた。

「あ、いや。ちょっとね

「困りごと？」

「うーん、ちょっと困りごとかな。でも、まあ……何とかなるのかな」「ふうん……ま、要がそう言つなり、そういう事にしておこう。それより、答えならオレの答案用紙貸そつか？」

「あ、助かる。黒板の字は、//://ズ這つてるみたいで、読みづらい」どうせ説明聞いたつて、チンブンカンブンなわけだから、都雅の答案用紙を借りて、バツテンがつけられたところに答えを書くことにした。

「今日は一日、こんな感じかな」

「そうだね。学年末試験も終わつたから、こんな感じかな」

他の答案も、都雅から借りようと心に決めて、三つ、間違つた答えを出す。

「ほー、サンキューな

「どういたしまして……」

都雅は自分の答案用紙を受け取りながら、俺の答案用紙を見て不思議そうな顔をした。

「記憶喪失になると、字まで変わるんだね……」

「あ？　あ、ああ……そ、そうみたいだな」

ノートに書かれた要の字と比べると、俺の字はかなり硬い字だ。明らかに違う。

何か言われるかとひやひやしたが、都雅からはそれ以上何も言われなかつた。

都雅は鞄を開けて、答案用紙をしまつ。その時見えた鞄の中身は、殆どがパズルの本だつたのには驚いたが、まあ都雅らしいっていえば都雅らしいか。

「要

「んあ？」

「さつきから気になつてること、聞いてもいいかな」

「なんだよ」

「あそこにいる猫。何だと思う？」

都雅が指差した場所は、教卓の上。

そこに真つ黒い猫が、ちょんと座つていた。

「だつ…大治郎…？」

俺の声で、教室の全員が教卓に乗つてゐる猫に気付いたらしく、教師が驚きつつ追い払おうと教科書を振り回す。

大治郎はその攻撃を軽やかにかわしつつ、机を飛び移り渡り、俺の机に乗つた後、俺の肩に飛び移つて耳元で囁いた。

「昼休み、屋上」

それだけ言って、大治郎は床に降りた。

教室は逃げようとする奴と、捕まえようとするやつで、めちゃくちゃになつてゐる。箱柳のやつは明らかにビビつて、教室の隅に逃げていた。

都雅がドアを開けると、大治郎はするりと抜けて、教室を出て行

く。廊下を覗くと、ゆらゆらとゆれる尻尾がみえた。

誰もそれ以上深追いせずに、何事も無かつたかのように授業を開。

したかに見えたけど、やっぱり教室はやわらぎたままだった。
「さつきの猫、だいじゅうひと言つの？」

「あ？ ああ、うん」

「要の猫？」

「あ、いや……えーと。知り合ひの猫」

「ふーん……」

都雅はそう言つた後、本当に何事も無かつたかのように、クロスワードパズルを解き始める。

それにしても、放課後でも良からうに……大治郎。
でも、退屈な雰囲気が少し減つたので、感謝かな？

教室を見渡していると、勇氣と田が合つた。こちらを見ていた様だつたけど、俺と田が合つて、さつと前を向いてしまつた。

第十八話

俺が首を傾げると、都雅が隣で小むく笑う。

「何だよ」

「さつきの猫も、同じように首を傾げてたからな。思い出しちゃつて」

「え？」

「教卓の上に乗つかつて、じぱらぐにうちを…つていうか、多分、要を見てたと思うけど。その時、誰も自分に気付かないことを不思議に思つたんじゃないかな？」「う…首傾げてたよ？ もちろん一番気付いて欲しいだらう、要も含めてだけどね」

俺は首を元に戻すと、ため息を吐いた。

「悪かつたな…鈍感で」

そういうえば大治郎の奴、何処から入つてきたんだろう。窓は全部閉まつてるし、ドアだつてきつちり閉じられていた。まさか、病院の時みたいにすり抜けて来たのか？ でも、すり抜ける瞬間を見られたら危険だよな。

「何、考え込んでるの」

都雅はクロスワードをやつてこいた手を止めて、身体を「じつちに」向けると、右腕で頬杖をついて呟つた。

「あ、いや。さつきの猫」

「大治郎？」

「ああ、うそ。その大治郎も、どうやって教室に入ったのかなーと思つて」

左手で、さつき教師が入つてきた前方のドアを指した。

「先生と一緒に、入つてきてたよ」

「……そん時に、言えよ」

「何で猫が入つてくるのかなとは思つたけど。まあ、オレには関係ないことだし」

「あなのなー。つていうか…マジ？ それで誰も…いや俺もだけビセ
…気付かなかつたのか…うわ…ちょっと…びっくり」

俺が身体を反らせてそう言つと、都雅は楽しそうに笑う。

「要といふと、退屈しなくてすみそうだね。高校生活が楽しくなり
そうだよ」

「何だよそれ」

「一応、ホメ言葉」

都雅は目を細めて微笑んだ後、黒板の上にかかつてゐる、丸いアナログ時計を見た。

「もうそろそろ終わるけど、次の授業どうする？」

「どうするつて…？ あ？ 何？ それはエスケープのお誘いか？」

俺の言葉に、都雅は肩を震わせて笑つた。

「何だよ…」

「「め…っ…。笑つつもりは…無かつたんだけど…」」

口から、くつくつく短い笑いが漏れる。何とかその笑いを抑えて、都雅が顔を上げると、なみだ目になつていた。
そんなに笑うことないじゃないか…。

俺の抗議の視線に、都雅は深い深呼吸をした後、ようやく話はじめた。

第十九話

「次の時間は自習なんだ。だから、どうする？って聞いたんだけ
ど」

「ああ、何だ…自習か」

ちょっとがっかりして、机に両腕で頬杖をついた。

「あと次の時間は自習で、そのあとの一時間はテストが返ってきて、
その後は、下校。って感じだよ」

「え…とこ「」とは、午後からの授業は無いのか？」

「無いよ」

それじゃ、昼休みじゃないじゃないか…とも思つたけど。まあ、
昼に屋上に行けば良いわけで。

「あ…それでお袋は、弁当を持たせなかつたのか…」

「匂」はん食べたいなら、学食があるよ。もひ、そんなに寄る事も
ないだろ「」し、帰りに寄つてく？」

「あー…金、持つて来てたかな…」

制服のポケットには入つていないことは、確認済み。と、なると。
鞄しかないわけだ。

俺はおもむろに鞄を机の上に載せると、開いて中を覗いてみた。

「あ、これかな」

財布を発見。でも中身が分からん。

恐る恐る開けて見ると、おお… わすが金持ちの財布は違う。俺
こと三刀屋 鋼樹の財布の中身の倍は入つている。下手したら三倍
か…？ 「う…」。

そういうえば、久しぶりに自分の名前を思い出したことによ付いて、
要といつ名前に慣れている自分に、少し驚いたりした。

「寄つてける？」

「あ？ ああ大丈夫」

「どうした？ ほんやつして」

「ちょっと…ね。大事な事…思い出した…ってどこかな」要に入つていられるのは、一年未満だ。

学校の雰囲気や友達と話すのが楽しくて、忘れてたけど。

俺は…三刀屋 鋼樹で、船迫 要じやない。

身体を搜さないと。

俺は思わず、深い深い溜息を付いてしまった。

「もしかして、身体辛いのかな？」

「あ、いや。大丈夫」

「無理しない方がいい。少し顔色悪いよ」

「ああ…うん。ありがと」

その時、丁度ベルが鳴つて、一時間目が終わつた。

教師が出る前に俺は勢い良く立ち上がり、教室を出て階段の横にあるトイレに駆け込んだ。

鏡の前に立つて、顔を眺めるためだ。

船迫 要の顔。

見慣れた俺の顔じゃない。

そう確認したと途端に、まるで拒否反応のように、身体が苦しくなつた。

息をするのが苦しい。

そんな時に、あの箱柳が入つて来るのが鏡越しに見えた。箱柳を含めて三人…いや四人はいるかもしれないけど、もう確認できない。目がかすんできた。兎に角、数人で俺を取り囲んだ。

「今朝の態度は何だ？」 船迫

お前に構つているどころじゃないって。

ヤバイ。耳鳴りする。

「高等部に行つても同じクラスなんだからな…、分かつてるのか？」 箱柳の横にいた生徒が、俺の胸倉を掴んだ。

ちくしょい…」こんな時じやなかつたら、振りほどけるの。」
 「箱柳さんはいぢゅうさんが、質問しているんだぞ！ 答えろ！」

力が出なくて、そいつに振り回されるままになつていた。

「何してるので？」

都雅の声。

「何だ、八潮路か。お前には関係ないだろ？」

「それが、関係あるんだ。今朝、友達になつたんでね。その手、離したほうがいいよ」

人が動く音がした後、俺の胸倉を掴んでいた手が離されて、俺はその場に崩れそうになつた。

誰かが、抱きとめてくれて倒れずにすんだけど。

「と…が？」

何とか息をついで、名前を聞くと、小さく返事が聞こえた。

「見ての通り、要は具合が悪い。それとも、そんなことも分からないのかな、君たちは」

「何だと？ 八潮路。お前が今まで平穏に暮らして来れたのは、誰のおかげだと思ってる」

箱柳の周囲にいた誰かが、そう言つた。その言葉に、都雅は小さくバカにするように笑う。

「保護者のお陰だらうね？」

「バカかお前はっ！ 箱柳さんが、お前を範疇外はんちゅうがいに置いて下さつてたからだらうが」

おうおう…同級生にむかつて“下さつた”だつてさ。具合の悪い俺でも、思わず突つ込み入れくなつたよ。

「こつちからお願ひはしていないけど？ 退かないなら、それなりの手段でるよ」

そう言つと、都雅は俺を背負つた。

「都雅…つ
「大丈夫?」
「何とか…」

「もうちょっと我慢して
そして都雅は突然、大声で叫んだ。
「あつ！ 猫だつ」

第一十一話

「なつ、何つ」「全員が注意をそらされたらじぐ、その隙にできた間をぬつて、トイレを出たらしかつた。

廊下に出た氣配。箱柳たちの声が遠ざかっていくのが分かる。都雅は俺を背負つたまま階段を一階まで駆け下り、保健室に運んでくれた。

「先生！」

「どうしたの？！　とにかく、ベッドへ」

保健室のベッドに寝かされた俺は、少し楽になつたために、都雅に笑つて見せた。

「猫だ…は良かつたな」

都雅は、俺が軽口をたたけるよつこなつたと氣付いたのか、ほつとして側にあつた椅子に座る。

「箱柳が、さつきの猫騒動におびえていたからね。多分、うまいくだらうと思つて」

制服の上着を脱いでハンガーにかけてもらい、シャツのボタンを一つ、自分で外した。

「サンキューな。楽になつた」

「そう…？ それなら良いけど。退院したばかりなんだろう？ 無理しないほうが良い」

「まったく、本当よ

そう言つて、ベッド周りのカーテンを開けながら保健室の先生が入つてくる。

「八潮路くん。もつすぐ授業が始まるから、教室に戻つた方がいいわね」

「はい」

都雅はそう言つて立ち上がると、俺を見下ろす。

「テストは受け取つておへよ。また後で

「ああ、悪いな」

軽く手を振つて、都雅は保健室を出て行つた。

「さて、船迫くん

「何？」

「何？　じゃないでしょ。保護者の方に連絡して欲しいの？」

「うわっ、『めんなさい』。連絡しないで下さこ」

「本当は…呼びたいところなんだけど」

「ほら、もう元気だし」

先生の白衣の胸元に付いているネームプレートに、《朝来》と書かれてあるのを見つけた。

「あさか？　ちょうさか？」

「え？　あ、名前？　これはね『あさか』と読むの」

「へえ…あさらですか。下の名前は？」

「すっかり元気になつたようで、先生も嬉しいわ」

そう言って、朝来先生は苦笑する。

「やせ我慢も程ほどにね。まだ少し顔色が悪いようだから、眠るといいよ」

「どうも…」

朝来先生はベッド周りのカーテンを閉めて行つてしまつた。

第一十一話

授業が終われば、教室に戻れるだらうじ。こゝは眠つておこうと、俺は決めた。

そう決めて、すぐに何処でも眠れるのが俺の特技の一つ。しかしだ。

目が覚めた時、すでにお昼だったのには、驚いた。

三年生の今日の日程はすでに終わっていた。都雅と勇気が迎えに来てくれて、ようやく目を覚ましたのだつた。

「御世話になりました」

制服を着なおしながら、カーテンを開けて朝来先生の前に出た。

「あら、顔色も良くなつたわね。帰りは気をつけてね」

「はい」

勇氣から鞄を受け取つて、保健室を出る。

「大丈夫？」

勇気が心配そうに、俺の顔を覗き込んだ。

「こんだけ寝れば大丈夫だよ。自分でもびっくりするくらい、寝ちまつた……」

「それじゃ、学食寄れるかな？」

「ああ、大丈夫だけど、ちょっとその前に用事があるから、先に行つてくれよ」

「えつ、あつ。僕も用事あるんだけど」

「そう？ 偶然だね。オレもなんだ。それじゃ、学食で待ち合わせようか」

俺が頷くと、勇氣はぎこちなく笑つて先に走つて行つてしまつ。

「何だろ？……さつきから勇氣の態度、変じやなかつたか？」「ん……ところで、学食の場所分かる？」

「ああつと、そうだっけ」

都雅から詳しく聞いた後、短くお礼を行つて急いで階段を上る。

駆け上りたかったが、さつきのこともあるから急ぎ足。箱柳が残っていると厄介なので、辺りに気を配りながら三年のフロアを通り過ぎ、屋上へと階段を上った。

第一二三話

屋上のドアは鍵がかかっていなかつた。

ノブを回して屋上へと出ると、何故か勇気が立つてゐる。しかも、後ろから都雅の声がして、俺は振り返つた。

「……いつもなら、鍵かけられてるのにね」

「都雅… 勇氣?」

「ほら、屋上に出て。鍵閉めるから」

都雅に背中を押されて、俺が勇氣の側に行くと、都雅は屋上のドアの鍵をかけた。

「これでよし… と。さて、不思議そうな顔してるね? 要」「だつて… 何で二人とも…」

勇氣と都雅の顔を交互に見ると、勇氣は困った顔をして見せた。

「僕… 空耳かとも思つたんだけど… 。『昼休み、屋上』って聞こえたんだ」

「……都雅も?」

「うん、まあね。まさか猫が喋るとは思わなかつたからさ。要の… 腹話術かと思つたよ」

某芸人さんの様に、声が遅れて届くまねを都雅がして見せた。「できないつて…」

「そう? それなら… やつぱり猫が喋つた… という事かな」「え… つと…」

「猫? 猫の声だつたの!」

勇氣が目を見開いて、俺を見つめる。

「え、その… どう説明していいや…」

「こんなに部外者がいたんじゃ、大治郎は出てこないだろ? しばよつ。

「猫がしゃべっちゃ、悪いかい?」

そう声がして、屋上の手すりの上に大治郎はいた。

勇気は口をポカンと開けて驚いているし、都雅は目を瞬かせている。

「どうやらさつきみたいに、一人にも見えているらしい。」

「前みたいに、他の奴には見えないようできなかつたのか？」

「俺がそう言つと、大治郎は手すりを下りて、俺たちの足元に歩いてきた。」

「残念ながらできなかつたんだよ。結界のせいだね」

「結界？…つていうか、そんな話、一人に聞かせていいのか？」

「どうやら、おいらの声が聞こえたようだし…良いんじやないの？」

「大治郎の言葉に俺は脱力。」

「でも、巻き込むわけにはいかない…と氣力で俺は大治郎と一人の間に立つて、ちょっと怖い顔をしつつ一人の顔を見つめた。」

第一一十四話

「巻き込みたくないから、屋上から出ていってくれないか」
勇気が哀しそうな顔をした横で、都雅は反対にっこりと微笑んだ。

「説明もなしに、オレが去ると思つ?」

「……思わない…けど! でもさ…」

「友達でしょ?」

思わず視線をそらしてしまつ。

友達。

たつた一日だつたけど、楽しかつた。あの頃に戻れたよつで。でも、俺は戻れない。俺自身の高校時代には。

俺は決心して、一人を見た。

「俺が、本当は船迫 要じやなくとも?」

都雅はいきなりふーっと吹き出した。

「嘘じやない! 俺は…」

「違う違う、知つてゐるよ…つていうか、うすす感じた」

「え…」

「記憶喪失つて言つたつて、変わり過ぎだし。ほら、地図の時。あの時から、おかしいなと思つてたんだ」

勇気だけがまだ、あんぐりと口を開けていた。

「ええつ…要くんじやないの?」

と、ようやく口を開いたかと思つと、その場にへなへなと座り込む。

「身体は要だけど、中身は三刀屋 鋼樹。^{みとや じゅうき}ついでに言つと、二十代後半です」

「ええつ…」

「へえ…」

一人の反応は正反対だった。

「そろそろ良いかな…」口も話、始めたいんだだけね
「あ…ええと。そういうことだから、どうする?」

「オレは残るよ」

都雅は考える間もなく、そう答える。

「借りがあるって、以前言つてたけど、あくまでも要にだろ?」

「まあ。でも、今は君と友達になつたんだし。友達になつた以上、
守るつて…言つたでしょ?」

「命を懸けることになつてもか?」

「もちろん。繋がりができた以上、君が何と言おうとオレにどつて
友達に変わりない。誓いは絶対だ」

「……マジで?」

「嘘は言わない」

俺は座り込んでいる勇気を見下ろした。

「勇気」

「……い、命懸けられるかなんて…分からないよ…つ…。で、でも、
僕だつて友達だもん。要くんじやないつて言われても、良く分から
ないし、理解できるかどうか分からぬいけど…でも、今日、僕、楽
しかったんだ」

「うん…俺も楽しかった」

「友達でいたいよ…僕。都雅くんみたいに役には立たないかもしけ
ないけど…でも、僕だつて友達でしょう? 友達でいてくれるよね
?」

第一十五話

泣きそうになりながら、勇気が俺を見上げてそう言つた。

「本当にいいのか？ 命を懸けるつていうのは、大げさに言つた事
だけど…でも、大変なことに巻き込むことになると思つ」

「命懸けなくてもいいの？」

「…分かんないけどさ」

後ろで、大治郎がやれやれといった感じに、ため息をついた。

「ちょっと、面倒なことになつてゐるのは間違いないけど」

振り返ると、大治郎はトロトロと俺の足元に歩いてきて、勇気の手を舐めた。

「お前さんはどうやら耳がいいらしい。あの場所からおいらの声が聞こえたんだからね。協力してもらえると、おいら達も助かるなあ」「本当？」

大治郎は勇気に向かつて、頷いて見せた。

「さて、一人の協力者ができたところで、説明に入るよ

俺はため息をつきながら頷いた。

もう、なるようになれつて感じだ。

「おいらが他人間に姿をさらした理由は、実は結界にあるんだ」「結界？ さつきも言つてたよな」

「うん。結界のせいで、姿を隠して入れなかつたんだ。それで、青空たちは中に入れない。そこで猫の姿をしているおいらが、入る事になつたわけ」

「ああ…なるほど。でも、ちょっと待てよ。青空だつたら制服着れば、ばれずに入れるんじやないのか？」

大治郎は首を横に振つた。

「そもそも行かないんだな。ここに張られている結界は古いものでね、結構強いんだ。青空たちが一步足を踏み入れれば、身体にかかるている術が全部解けて、物凄い格好になるだろうね。制服着た

つて誤魔化せないさ。お前さんの気が途中で遮断された……って言うのも、この結界のせいらしい。中に入つてみて、どうだつた？」物凄い格好つてのが気になつたけど、大治郎が『物凄い』に力を入れて言つたので、怖くて聞けなかつた。

第一十六話

「校門のところで物凄い圧を感じた後は、何もないかな…。気つての見つかってない」

「そうか…やっぱりここじゃないんだなあ」

俺と大治郎は同時にため息をついた。

「あの…話の途中悪いんだけど。オレたちには説明してくれないかな」

「あ？」

「結界とか青空とか言われても…ね」

都雅の視線を受けて、勇氣も深く頷いた。

「ああ…そつか、悪い。えつと…えーと。何から話せばいいのかな」「船迫 要の身体に入つた理由つてのを聞かせてくれないかな」

「あー…。話してもいいのかな…大治郎」

足元にいる大治郎に尋ねると、大治郎は首を傾げて小さくため息をつく。思わず同じように首を傾げてしまつた。

「話さないと、次の話ができないから…まあ仕方ないなあ」

「ええと、俺も実はよく分かつてないところがあるんだけど。俺の身体が盗まれたみたいなんだ」

「……盗まれた？」

「そう。んでもって、隠されちゃつたから戻れないんだよね」

俺の話では、やはり理解は難しいらしい。

二人とも首を傾げている。どうやら俺だけじゃなく、二人まで大治郎の影響を受けてしまつたみたいだ。

「盗まれて…隠された…？」

勇氣は一生懸命理解しようと考へ込んでいたが、しばらくして諦めたのか肩を落とす。

「よく分からないけど…面倒なことになつていて、さつも言ってたよね。大治郎」

大治郎は都雅の言葉に、小さな身体がぴょんと跳ねた。

「ああっ！ また呼び捨て……はあ、やっぱり猫になるんじやなかつたなあ…」

そう呟いて、大治郎は俺たちを見上げた。

「なんだよ。青空だつて大治郎の事、呼び捨てじやないか」「だつて青空はおいらより年上だし、相棒だからいいんだよ」

「青空つて人の名前？」

勇氣に言わされて、説明をしていないことに俺も大治郎も気が付いた。

「そう。おいらの相棒の名前だよ」

「そつそつ。上下真っ黒な服着てる奴でや」

「青空は、いつも真っ黒な服を着ているわけじゃないよ？　いつも真っ黒な服を着ているのは『じゅう』の奴らだけさ」

俺と勇氣と都雅の目が点になる。

「じゅう…って何？」

「あつ…ええと。うーんと。その説明は今度。それより、さつきの続きだけど。面倒な」とつていうのは、その結界のことなんだ。実は、隣の校舎の結界が一度壊され、再び構築されたみたいなんだ」「何が面倒なの？」

「その結界に入った猫や鳥なんかが、戻つてこない」

「戻つてこない？」

「そう…因みに、その猫や鳥つて言つのは、おいらと同じような仕事をしている奴らだよ。そいつらが戻つてこないつていうんで、青空は心配して…おいらを向かわせてくれないんだ」

どうやら深刻らしい。

大治郎と同じ仕事…といつことは、きっと青空たちの代わりに偵察するのだろう。

「どれくらい？」

都雅が大治郎に視線を合わせるために、しゃがんだので俺も同じくしゃがむ。

「鳥が三羽に猫が四匹。全員が戻らないのはおかしいだろ？　それで、青空はお前さん達が通うこの校舎に、気があつたかどうか確かめて来てつて言つてた。なるべくなら、こっちの校舎にあつて欲しいつて…ここに無いつて事は…つまり」

「…つまりは、その結界が構築された校舎が、怪しそうなことが…
都雅と勇氣は御互いに顔を見合わせると、苦笑する。

「気つて何？」

「あ… そうか。ええと、何だっけ？」

確かに青空に説明を受けたと思うけど。…忘れてしました。

大治郎がため息をついて、説明する。

「器と… 器ってのは肉体の事。器と魂を繋ぐ糸みたいなものだよ」

「ちょ… つとまで、大治郎…」

俺は「ぐんと睡をのみ込んだ。

「確かに遮断されているだけで、切れているわけじゃ無かつたんじ
やなかつたか？ それなのに…この校舎に気がないという事は…」

「切られちゃつた…」

「なつ…」

第二十八話

「つて」とは無いと思つ。だつてそつだとしたら、切られた氣がお前さんに絡みついてくるはずだからね」

絶句。

の後に、大治郎の首を絞めた。

「がつ…ぐるじい…」

「やめなよ、要……あ、要でいいのかな」

都雅が困つたように笑いながら、そう言つた。

俺は手を離して（もちろん本氣で絞めてはいないぜ？）大治郎を下ろした。

「一応、要の身体だし。ややこしくなるから、要でいいよ」

「分かつた。さて、大治郎は大丈夫？」

「く、苦しかつた…ちょっとした冗談じやないぞ…もう。動物愛護団体から、苦情が来ても知らないよ」

大治郎は身体を、一瞬震わせてから都雅を見た。

「分からぬことだらけだらうね？ これから青空のところに行へから、一緒に来るといいよ。もつと詳しく述べてもらえると思つかね」

そうして、次に勇氣を見つめた。

「さつきから黙つているけど、大丈夫かい？」

「え？ あ、はい」

勇氣は大治郎の言葉に素直に「クンと頷く。

ようやく体勢を立て直して、えへへと笑つて見せた。

俺は何だかほつとして、ほつとした後に再び気持ちを引き締めた。

「氣のことも説明してもらえるんだろうな？」

「もちろん」

「で…結局、屋上に呼び出した理由は？ こんな話なら、学園の敷

地外でも良かつたんじゃないか」

「こつから隣の校舎が見えるからぞ。ほれ、あれを見せたかつたんだよ」

そう言つて大治郎は、再び手すりに上ると、視線を隣の高等部校舎に移した。俺たちも立ち上がりて手すりに近寄る。

そこに見えるのは、中等部校舎とあまり変わらない校舎。ただ違うのは、屋上で何かがゆらゆらと揺らめいていた。

「何だ、あれ」

「僕、砂時計に見えるんだけど……」

「……オレにもそう見えるよ」

勇気と都雅の言つとおり、よくよく見てみると確かにぼんやりと砂時計のようなものが見えた。

ただ、建物の大きさから考えて、どう考へても俺たちより遙かに大きい、砂時計だ。中身はまだ上のほうにあつて、下に落ちているのは僅かだった。

「大治郎……あれは？」

「悪趣味だよ、あれはね。砂じやないんだ」

「砂じやない……となると……中身は何？」

大治郎は空を見上げた後に、ため息をついた。

「あれは……魂なんだ」

「魂……？ 砂に見えるの全部？」

「そう。あれはね、魂を特殊な球に封じ始めたものなんだ。きらきら光つてるだろ？」

大治郎の言ひどおり、その砂に見える珠は、色取り取りに光つていて、綺麗だつた。

「思いつきり、青空たちを挑発してゐよ。阻止できるものなら、してみろつてさ」

「あれが？」

「そつ。あの砂が全て落ちるまでに、こつちはお前さんの身体を見つけなくちゃいけないってこと。分かったかい？ あの砂時計はあ

る意味、わざと居場所を分からせるために置いたみたいだし

大治郎は俺たちを振り返って、ため息をついた。

「そもそも、おいらも疲れてきたから、結界の外でるよ」

猫の姿をしているとはいえ、やっぱり結界は身体に負担を与えるらしい。

第二十九話

「あ、それじゃ。僕たちもどうせ外にでるから、僕が君を運んであげようか?」

「あ、ちょっと待て。学食は?」

「学食どこのじやないでしょ」

都雅が苦笑しながら俺の肩を叩いた。

「そうりや そุดだけどさ」

「それじゃ、よろしく頼むとしようかな」

大治郎は手すりから勇気の肩にひょいと飛び乗った。

「で、何処に行けば青空に会えんだ?」

「稻頭司川にかかる橋の途中」

「……何だ……その中途半端では」

「稻頭司橋の事?」

勇気が尋ねると、大治郎は違つという。

「ほれ、もうちつと上流に車は通れない橋があるだろ?」

「ああ……と都雅と勇気は頷いたけれど、当然の事ながら俺には分からぬ。」

「ちょっと歩くけど……要くん大丈夫?」

「ああ、平氣だ」

都雅が俺の言葉に小さく笑う。

「要の家の車に迎えに来てもらえば?」

「ああ?【冗談じやないつづーの……つていうかわ…頼みもしないのに来てたらどうじよび】」

考えられる。

「来てる可能性のほうが高いよね、何しろ要はまだ退院して間もないんだし」

都雅が校庭を見下ろしながら数台止まっている車を、指差す。

「車…分かる?」

「わかんねえ…」

「兎に角、下りてみようよ。ね？ 要くん。都雅くん」

屋上のドアの鍵を開けて、俺たちは生徒玄関へと階段を下りた。

「そういえば、屋上の鍵を開けたのは大治郎？」

都雅が勇気の横に並んで歩きながら、肩に乗っている大治郎に話しかける。

「ま、一応そりだよと言つておく。大丈夫、もう今頃は鍵がかかっているはずだよ」

「ふうん…」

靴を履き替えて玄関をると、案の定お袋が迎えに来ていた。

「要」

「げつ…と言ひそになつた口を俺は何とか閉じた。

「帰りましょ、要」

「え、ええと。ううんと…約束…そりー 友達と約束があるんだ。約束つて大事だよね？」

作り笑顔でそういうと、お袋は仕方なさそうにため息をついた。

「稻頭司川で待ってるんだ」

「……分かりました。それじゃ、送るわ」

「二人もいいよね」

勇気と都雅を見ながら言つと、お袋は一瞬都雅を見て眉をひそめたが、頷く。

どうやらお袋自身が運転して来たらしく、俺は助手席で勇気と都雅は後部座席になった。

「猫も乗せるの？」

「大丈夫だよ。おとなしい猫だから」

俺の言葉に大治郎が可愛らしい声で鳴く。これこそ猫撫で声だ。

「暴れたりしないわね？」

「しないしない」

エンジンがかかり、車がスタートすると見慣れない町が通りすぎる。

青空に貰つた地図の範囲外の場所へと向かつてゐるから、途中で頭の中の地図も途切れた。

信号に何回か引っかかつた後、ようやく川にたどり着く。そこはもうすぐ海に近い場所だった。

橋が架かっている。

その橋の袂から少し離れたところに車を止めた。

第三十話

「あれが稻頭^{いなず}司橋。それで、あつちが約束の橋^{いなす}都雅が説明してくれた。

稻頭司橋から数百メートル上流にかかる細い橋。

「あら、向こうだったの？」

お袋がそう言って再び車をスタートさせる。

そして約束している橋の所で止めてくれた。

「ここは車が通れないから、私はここで待っているわね。早く戻つていらっしゃいよ」

「分かった」

三人と一匹で車をおりて、橋を渡る。

丁度中央の場所に、青空が立っているのが見えた。

「お久しぶりですね」

青空の元にたどり着いた俺に、にっこりと微笑んだ青空は俺の後ろに付いて来ていた二人を見て深々と頭を下げた。

「始めまして、青空と申します」

「あ、こちらこそ始めまして。僕、鳶沢 勇気です」

「八潮路 都雅」

一人の名前を聞いて、青空は嬉しそうに頷いた。

今日の青空は黒い服ではなくて、紺色の制服らしきものを着ていた。あいにく何処の制服かはわからないけど。

「これからは定期的に連絡できるようにします。あの砂時計があるという事は、コレクターが関わっているようですから」「コレクター？」

俺たち三人が声を合わせて言うと、青空は頷いて見せた。

「僕たちが勝手にそう呼んでいるだけですけど。コレクターと呼ばれる人々です。集団ではなく、大抵は一人で行動していることが多いんですよ。でも、今回は複数のコレクターが絡んでいるようです。

あの魂玉の数は僕が見た中でも類を見ない数です。それで砂時計を作るなんて……」

「こんぎょく?」

「たましいの、たま…と書いてこんぎょく…といいます。魂が封じられた玉のことです」

青空がため息混じりに言つた途端に、橋の欄干にカツンと何か硬いものが触れた音がして、俺たちは音のした方に視線をやつた。

青空の斜め後ろの欄干の上に人が立つていた。

いつの間に来たのか、橋を渡る音はしなかつたのに。

「我らはあの砂時計を玉響たまゆらと呼ぶ。近くにいると、それは素晴らしい音を奏でるのでな」

欄干の上に立つているその人物は、牧師のような服を着ている。正面から見ているのでよくわからないけど、どうやら髪が長いらしい。その髪は金色に光っていた。

俺たちが言葉も出さずに青空に視線を戻すと、青空は辺りを見回している。

「ラゴ様。早く欄干から降りて下下さい」

青空の声が以外に厳しく聞こえて、俺は少し驚いたけど…そのラゴ様と呼ばれた男の方を見ると特に怒った様子も見せずに、欄干を降りて青空の隣に立つた。背が高い。都雅と同じくらいかも。

「あれほど上から下りてくるのはよして下さいとお願いしましたのに」

青空は深いため息をつく。

「良いじゃないか。誰にも見られてはいないよ。それに、見られたところで、その人間は田の錯覚だと思つぞ」

小さく笑つた後、ラゴと呼ばれた男は俺に手を差し出した。

「そなたが噂の少年か?」

「……三刀屋鋼樹です。今は船迫要の身体を借りていますけど…」

雰囲気に圧倒されて、おもわず敬語をつかってしまう。握手を交わした。

「コレクターの血が騒ぐね。他のコレクターも喉から手がでるほど欲しがっているだろう」

ラゴが言った言葉に青空はさつと表情を硬くした。

「ラゴ様…それでは何か分かったのですか？」

「そうだね…。かなり大変ことになってきた様だよ」

隣の勇氣と都雅を見ると、置いてきぼりにされたよつな顔をしている。そして俺の方を見ると苦笑いしてみせた。俺も苦笑して返していると、青空が「何てことだ」と小さく咳く。

「青空…えつと…悪いんだけど…説明してくれない?」

「ああ…そうでした。申し訳ありません。こちらはラーマ様。僕の…何と言えばいいでしよう?…その…養父…でしょうか?」

「養父?」

「私は父親になつたつもりはないんだけれどね…せめて師匠にして欲しいのだが」

ラゴは微笑みながら青空にそう言った。

「申し訳ありません…ええと、それで僕が今の職業につくまで面倒を見てくださつた方です」

「ちょっと待て。そもそも青空たちの職業って何だよ」

俺たちの足元で、のんびり毛づくろいをしていた大治郎が驚いたように跳ね上がつて、俺を見上げる。

「あれ? 言つてなかつたつけ?」

「聞いていない」

「おやおや…どうやら最初から説明しなくてはならぬようだね。

青空」

「はい…申し訳ありませんでした。話す機会がなくて…まあ、僕は現在探索部に所属しています」

「探索部?」

「はい。お氣づきの事と思いますが、僕らは黄泉の国つまり死んだ魂が集う国で働いています。色々な仕事があるので、いわゆる死神とあなた方が呼んでいる仕事もその一部です。大まかなものを言いますと、僕が所属する探索部、それから”らいごうぶ”。あと”ほうじべ”ですね。この二つと…それらを統括する玉蘭。たままゆ それ

からこの部に所属していなしコレクター、それから”じゅう”の一
つ

都雅の隣で、勇気が黄泉の国？と小さな声で驚いている。

「探索は分かるとして…『らじこい』『ひぶ』とか『ほうりべ』って何だ
よ」

「来る…の来に迎えるで来迎です。あなた方が死神と呼んでいる仕
事です。つまり死者を迎えて行くんですよ。ほうりべは祝う部です。
大抵の場合にはほうりと呼びますが。この仕事は魂を清めて生まれ変
わる手伝いをする部署です」

「あの〜、統括する部が何で『玉蘭』って言つんですか？」

勇気が恐る恐ると言つた感じで尋ねると、青空が困ったよつた顔
をした。

「それを説明すると、長い歴史の話になつてしまつので、もう少し
時間ができたらお話しすると約束します
ラゴ様がうんうんと頷いた。

青空の隣でラゴ様が動くと金の髪がキラキラ光って、集中力のな
い俺はつこそつちを見てしまつ。俺と田があつたラゴ様はにつこり
と微笑んで見せた。

「青空」

「はい？ 何でしようか、ラゴ様」

「どうやらここではゆっくり話ができるないようだ」

ラゴ様は俺を見ながら言つたので、俺は何だか慌てて（ラゴ様み
たいなのは苦手なんだよな）首を横に振る。

「あ、いや。えつと」

「そう言えば、要くんのお母さんも待つていてるし、あんまり長く話
さない方がいいかもしないよ…」

勇気が車の方を見ながらそつと言つた。

「そうだったつけ…」
全員が車の方を見ていると、都雅が小さく唸る。

「どうしたの？ 都雅くん」

「…………いや、オレの家で良ければ、場所を提供するナビ」

「え？」

「ここから近いのはオレの家だろうから
青空と俺は顔を見合させて、頷いた。

「それじゃあ、お願ひしてもよろしいですか？」

「いいよ」

「それでは、先に八潮路さんの家に向かってください。僕らもすぐ
に行きますので」

「分かった」

小走りで車に戻ると、お袋がほつとしたように微笑んだ。心配し
ていたようだった。

「ごめん、これから都雅の家に遊びに行く事になつたんだけど…」
後部座席のドアを開けて、都雅たちの鞄を取つて渡しながら言つ
と、お袋の顔色が変わる。

「ええ？」

「すぐ近くだから歩いていくよ。それじゃ」

ドアを閉めて行こうとするとき止められた。

「待ちなさい、要

「何？」

「乗りなさい」

険しい顔でお袋がパワーウィンドを開けて顔を出す。

「友達の家に遊びに行くくらい良いだろ？」

「ダメだと言つているんじゃありません。乗りなさいと言つてるの。
あなたは退院したばかりなのよ？ お願いだから、心配させないで

頂戴。お友達の家まで送るから

俺はちょっと驚いて目を瞬かせた。もつとヒステリックに反対すると思つていたからだ。

「……分かった」

勇気と都雅と顔を見合わせて頷くと、車に乗り込む。「送る前にお友達を紹介してもらえるかしら？」

「あ、ええと……」

勇気が俺の目を見て小さく頷いた。

そういうえば、お袋は勇気のことは知つてているんだだけな。

「えっと、鳶沢のことは知つてるよね。鳶沢 勇気くん。それでこつちは八潮路 都雅くん。同じクラスだよ」

都雅はバツクミラーに映つたお袋に軽く会釈して見せた。

「それで、どちらのお宅に伺うのかしら？」

「都雅くんの家に」

「そう… それじゃ、道案内をよろしくね」

都雅はコクンと頷く。

「まず左折を」

「左折ね」

ワインカーを上げて左折する。

次の信号を右に曲がつて少し狭い道路を入つた後、まっすぐ行くと広い道路に繋がつっていて、その道を右折。丁字路の角に都雅の家はあった。

「……なんだか…馬鹿でかいな」「住居として使つてゐるのは半分くらいだよ」都雅の家は二階建ての一軒家の隣にもう一個平屋の家がくつ付いているような形をしていた。

表札には“八潮路 右文”と書かれてある。

「八潮路…う…ぶん?」

俺の眩きに都雅が小さく笑つた。

「なんだよ…」

「ごめん。それは“うもん”と読むんだ」

「うもん?」

「えい。あいぶんとこう古語からきてるんだってさ」「ふうと…」

などとやつとつしていふと、お袋が小さくため息をついた。

「あの、右文…なのね?」

といつので、俺は首を傾げた。

「あの? と書つと?」

「えー? 要くん、もしかして八潮路 右文知らないの?」

「何だよ…勇氣は知つてるのか?」

「もちろんだよ」

誇らしげに胸を張る勇氣に向となく腹を立てて、俺は勇氣の鼻を軽くつまんだ。

「じゃあ、教えるよ」

「て、はなひてよー」

都雅が勇氣の答えを待たずドアを開けて車を降りた。
「家に入れば分かるよ」

「お、おひ」

俺は勇氣の鼻を掴んでいた手を離した。

「もう…要くんは乱暴なんだから…」

「何だと？」

「わー。『めんなさい』『めんなさい…』」

勇気が慌てて車を降りる。俺も急いで降りて勇氣を捕まえると、わき腹をくすぐった。

「わー、くすぐったいよ… やめてつってばー…」

ケラケラと勇気が笑うと、車の中からお袋の小さい笑い声が聞こえた。

「お袋？」

「『めんなさいね…』そんなに楽しそうな顔を見たのは久しぶりなものだから…」

そう言つてくすぐす笑う。

「それじゃ、電話して頂戴ね。迎えにくるから」

お袋は軽く手を俺に向かつて振ると、車を発進させた。

その車が角を曲がるのを見送つて、俺たちは都雅の家に入った。

「お邪魔します…」

「…へえ…隨分と…絵が多いなこ」は

玄関にいきなり龍の絵がお出迎え。さらに廊下に山の絵と鳥の絵。リビングに入ると、どテカイ絵が飾つてあった。見返り美人つてやつか？ 着物を着ている女の絵だ。

「うわー、本物だ！」

勇気が歓声をあげて絵に近付く。

「僕、絵画集でしか見たことないよ」

「…なるほど…と、言つ事は都雅の親父さんは画家なわけだ？」

都雅は頷いた。

「あっちの平屋はアトリエなんだ。だから半分は父のスペースつてわけ」

「ふうん…」

「要くん！ この絵はね、右文の奥さんがモテルなんだよ…」見返り美人を見ながら、勇気は俺に説明する。

「つづー」とは、都雅のお袋さんか…へえ。美人だな

「有難う」

と、いきなり後ろから声がして、俺は振り返った。

「え、あつ」

そこには絵の見返り美人と同じくらい綺麗な女人人が立っていた。洋服だつたけど。

「始めて。都雅の母です。八潮路 真鶴、マナちゃんつて呼んでね？」

キャピ（後にハート）…という効果音がつきそな感じだった。見た目、いいトコのお嬢様つて感じ。都雅の母親にしては若くみえた。

「お母さん…」

「やだー、マナちゃんって呼んでつてばー」

都雅は俺と勇気に苦笑して見せた。

「マナちゃん」

「はい、何かしら？」

都雅

「友達、紹介するよ」

都雅が言った言葉に、都雅のお袋…マナちゃんはひどく驚いた様

子だった。

第三十五話

「まあ…友達？ 都雅が友達を連れてくるのは初めてじゃない？ 今晩は御赤飯炊いちゃおつかしら」

「…まず、どうやら右文のファンらしい、鳶沢 勇氣。それで、こっちが船迫 要」

勇氣は絵とマナちゃんを見比べて、ほっとため息をついた。

「お会いできて光榮です」

「まあ、うれしい」

勇氣は右手を制服の裾で拭いてから、マナちゃんと握手を交わす。
「物凄くファンなんだな」

「うん。僕、画集を全部持ってるよ。展覧会が開かれる場所が遠くて、今の僕じゃ行けないけど。大人になつたら、絶対に行くつもりなんだ。お金をためて、いつか八潮路 右文の絵を買うのが夢なんだよ」

勇氣は氣づかなかつた様だけど、後ろで小さくため息が聞こえて、俺は気がついて振り返る。

そこには作務衣に身を包んだ初老の男が立っていた。

「あ、お父さん」

都雅が氣づくと、作務衣の男は近付いてきた。

「要、勇氣。父の右文」

「…八潮路 右文だ」

てつきり祖父かと思つた…と呟つ言葉は呑み込んで（勇氣は知つていたみたいだつた）、俺は会釈する。

「めずらしいな、お前が友達を連れてくるとは…天変地異の前触れか？」

「あら、いやだ…右文さんつたら。面白い冗談」

「お父さんが冗談を言う方が珍しくない？ そつちの方が天変地異の前触れかも」

「わしは本氣で言つたのだがな」

「あらそつなの？ それじゃ、災害対策しておこなつかしく」

「今までしてなかつたの？ お母さん」

「都雅つたら、マナちゃんつて呼んでつて言つてるでしょう。ねえ、右文さん。今日は御赤飯炊こうと思つた。素敵でしょう？」

「……お前に赤飯が炊けるのか」

「あら、最近の炊飯器を甘くみぢや いけないのよ」

「赤飯は作らなくてもいいって。それより、お匂い飯を用意してもらえない？」 マナちゃん

八潮路一家の会話に入り込めず、俺と勇気はポカンと立っていた。

「何だ、まだ昼飯も作つていないので。正午は過ぎたぞ」

「あら、いけない！ すぐ作るわね」

「オレ達は一階にいるからね。できたら呼んで」

「分かつたわ」

まだポカンとしながら、俺と勇気は都雅について階段を上る。

階段を上つて左右に一部屋づつ。突き当たりにもつ一部屋。その突き当たりの部屋が都雅の部屋らしかつた。

「入つて」

「ああ」

十一畳くらいの部屋だった。

その中に大きめのベッド（後で聞いたら特注品だそうだ。背が高いので、既製品だと足がでるんだと黙ってた）と、勉強机。その勉強机は俺の記憶の中にある机と違って、茶色じゃなかつた。隣にあらックと同じ材質で出来ているらしい。上の部分は淡いブルーで支柱は薄いグレー。部屋全体がブルーを基調としているようだ。本棚までブルーだ。

「好きなとこに座つて」

都雅はそう言ってクッショーンを俺たちに渡す。

「サンキュー。それにしても、お前の両親つて変わってるな。親父さん、いつもあんな感じ？」

都雅は首を横に振つて笑う。

「あれは営業用だね」

「営業用…？」

「そつ。勇気がファンだつて言つのを聞いていたんじやないかな？画家としての外観を作つてるんだつて。今、下に行つたら面白いと思つよ」

俺と勇気は顔を見合せた。

「面白い…とは？」

「見に行く？」

「行つてもいいのか？」

「勇気は？ 行きたい？」

「ちょっと…見てみたい」

都雅は苦笑して、頷いた。

「静かに下りてね」

俺たちは都雅の部屋を出て階段を静かに息を殺しながら、ゆっくりと下りた。

下から微かに声が聞こえてくる。

都雅の親父さんとマナちゃんの笑い声だった。

「右文さん、はい、御味見～」

「ん…うん。美味しい」

「本当? うれしい~」

「これは洗っちゃつてもいいのか?」

「うん、いいよ~」

そつと影から覗くと、右文さんはマナちゃんとお揃いのフリルが

沢山付いた白いエプロンをしていた。

満面の笑みでボールや菜箸を洗つている。

そして、視線に気づいたのか俺たちを見つけて慌ててしまい、お皿を一枚割つてしまつた。

「とつ、都雅つ」

「じめんじめん」

「右文さん、怪我しちゃつわ。ほら、もつ良心から。じ飯をよそつてくれださいな?」

「う、うむ」

「僕も手伝います」

勇気が皿をキラキラさせて駆けぬつて行つた。

カレーの香りが鼻腔をくすぐって、お腹がぐぐーっとなる。そういえばお腹が減ってきた。

「右文さんと一緒にご飯の用意ができるなんて、夢みたいだ」頬を紅潮させて、勇気は右文さんがご飯をよそったお皿にカレーをかけていく。

「何で幸せな昼食なんだろ？！」

勇気はそう言いながら俺に皿を手渡し、俺はそれをテーブルに並べた。

都雅はスプーンやコップを並べている。

準備が整つてようやく昼食を取つたのが十一時四十五分。

そのカレーは豚肉、じゃがいも、にんじん、たまねぎというカレーで、野菜が大きく切られていて、食べ応えがあった。

俺たちが談笑しながら食べている中、勇気だけスプーンを持ったまま微動だにしない。

「勇気？ どうした？」

「僕：胸いっぱいです：食べられないよ」

本当に勇気つて面白い奴だよな。感情の表し方が大げさというか、何と言うか。兎に角見てて面白い奴だ。

「でも折角一緒に用意した昼食、食べないと後で後悔しない？」

都雅に言われて勇気は一回頷いて食べ始めた。

一口一口、かみ締めるようにゆっくりと食べる。

何だか涙を流しそうな雰囲気。

勇気の前で画家の仮面を被らなくともいいと都雅に言われた右文さんは、すっかり好々爺と化している。

「僕、画集持つてくれば良かつたなあ…今度、一画集にサインしていただけませんか？」

勇気が食べ終えてそう言つと、右文さんは首を傾げた。

「都雅、私の部屋から【あれ】を持ってきなさい」

「うん、わかった」

しばらくして都雅が一冊の本を持ってきた。

「新しい画集だ。これにサインして君たちにプレゼントしよう」

「ええーっ！」

勇気は目を見開いた後、潤ませて身体を震わせた。

「はあ……」

俺は興味ないことなのでテンションは高くない。

目の前でサインをして貰って、さらに【鳶沢 勇気くんへ】と入れてもうらい、感激している。

「こつ……これ発売前の画集じゃないですか！　うわー……ぼ、僕…倒れそう……」

「そんなにわしの絵を好いてくれてるのか…有難う。さて、こっちは君に」

右文さんはもう一冊を俺に手渡そうとした。

「俺が受け取つてもいいんですか？　俺、右文さんのこと全然知らなかつたんですけど」

「そんなこと気にするものでは無い。わしを知らない人は五万といふ。知つてゐる者でも、わしの絵を好きな者も嫌いな者もいるであります。だから、君にも好き嫌いを強制するつもりは無い。が、ぜひ、見て欲しい。都雅の友達だ。都雅がこういう絵を見ながら育つたという事の一 片を…知つて欲しいのだよ」

俺は深く頷いて、受け取つた。

「有難う御座います」

右文さんは微笑んだ。それはきっと、家族の前でしか見れない笑顔だったんだと思う。

とても和やかな昼食だつたけど、俺は窓の外にキラキラ光るものを見つけて、はつと気づいた。

「都雅」

俺の方を振り向いた都雅は、気づいたのか頷いて立ち上がった。
「さ、片付けちゃおうか」

「あら、後片付けなら右文さんと一人でやるから良いわよ。今日はお友達も来ているんだし、特別に免除しちゃう」

「そう？ 有難う。それじゃ、行こうか」

「うん」

ぱやーっとしている勇気を引っ張って一階に上がる。
駆け上がって都雅の部屋に入ると、鍵をかける。つづーか鍵つき
羨ましい。

部屋には青空と大治郎がすでに待っていた。大治郎はベッドの上
に、青空は立つている。

「悪い！ 待たせたかな」

「大丈夫ですよ」

「かなり待ったんだけどねえ」

青空がにつこりと微笑んで言つた後、大治郎がわざとらしい溜息
をつきながら首を振る。猫の溜息……ちょっと面白い。

「こら！ 大治郎」

大治郎はそ知らぬふりで、歩き出すと窓から顔をだして一ヤーと
鳴いた。

その声が合図なのかラゴ様が窓の外から入つてくる。

「窓の外がキラキラしてたから、気づいたんだけどさ……」

俺がそう言つと、ラゴ様はにつこりと微笑んで長い髪を指でつま
む。

「ふうむ。私の髪も役にたつのだな」

「じ」「ひ」で、時間もあまりない事だから、やつやと説明始めてくれよ

「はい、分かりました。ええと、それでは…何から説明しましょうか」

青空が頷いて俺たちの顔を見回す。

「俺が一番聞きたいのは、俺の身体が盗まれた理由」

「それは、こちらでも分からないとお答えしておきます。ただ、いくつか推測できることがあります。第一に生贊の場合は。第二に新しい器。^{うつわ}第三に依り代の三つです」

青空が指を一本一本壇やしながら説明する。

「生贊は何となく分かるけど…新しい器と、それから依り代って何だよ」

「新しい器とは、^{みとや}二刀屋^{じとうや}鋼樹^{こうじ}さんの身体に違う魂を入れる…と言つ

事です」

「今の俺みたいにってこと?」

「はい」

俺の身体に俺じゃない違う魂が入ると思つたら…いや、かなり変な気分だった。

要もこんな感じだつたんだろうか。

「それじゃ、依り代は?」

青空が説明する前に都雅が本棚から辞書を引っ張り出してきて、開く。

「“依り代”神靈が現われる時の媒体となるもの…だそうだよ。つまりは神様を君の身体の中に下ろすってことだね」

「はあ…?」

理解しにくい。俺に神靈を下ろしてどうするんだよ。

「ラゴ様から先ほど教えて頂いたお話だと、どうやらコレクターと人間が結託しているようなんですね」

「それが何か?」

「コレクターは器など求めん。魂…それも美しい音を奏でる魂を手

に入れたがるのだ」

第三十九話

「ラゴ様がうれしそうに説明を始めた。

「大抵コレクターは彷徨つてゐる魂を捕まえて氣に入つたものを集める。だが、今日は何を考えたのか、人間と協力することを思いついたらしい」

「個人主義のコレクターでは珍しい事です」

青空が難しそうな顔をしつつ、そう言った。

「そういうえば、さつきも複数のコレクターが関わつてゐるって言ってたつけ？ でも複数のコレクターで俺一人の魂？ 魂つて分割できるのか？」

「魂 자체は分割できません。しかし、記憶は分けることができるんです」

「記憶…？」

「はい。魂には記憶という霧のようなものが詰まっています。それを魂玉よりもさらに小さい玉に封じ込めます。それをコレクションにするコレクターも多いのです」

「楽しい記憶だけを集めるものが多いが、逆に苦しい記憶や哀しい記憶を集めているコレクターもいる。私には理解できないがな…」

ラゴ様は美しい（俺がいうのもなんだけどさ）眉を寄せ、首を横に何度も軽く振った。

「魂玉はきれいな音を奏でるって言つてたけれど…記憶の玉はどうなるのかな？」

都雅が聞くと、ラゴ様がにっこり微笑む。説明するのが楽しいようだ。

「そうだな…。そなた達の世界でいうと、魂玉がオーケストラであり記憶が楽器といったところだろう。記憶だけでも音は奏でる。だが、魂玉というオーケストラに勝る音はない。特に玉響^{たまゆか}は素晴らしいのだ」

「ラゴ様の隣で青空が少し呆れた顔をした。

「ラゴ様… 本当はあちらのコレクターに加わって、砂時計の玉響を
聞きたいと思つていらつしやるのではないでしょうね」

「む…いや。 そうではないのだが」

「そりいえば、ラゴ様もコレクターだつて言つてませんでした?」

勇気が思い出したように言つと、青空が頷いた。

「それなのに… 何で青空さんと一緒にいるんですか? 個人主義じ
やないんですか?」

「私は特別なのだよ」

「ものは言ひよつ… ですね。 ラゴ様は面白いと思つたことにしか関
わらないのです。 普段はお願ひしても手伝つてくださいない」

「俺の身体が盗まれた事が、面白い事?」

俺がラゴ様を睨みつけると、意に介さないといった様子で笑う。
「そなたが面白いのでな」

第四十話

「俺が…面白い？」

「そう。そなたは五百年に一度、現れる…という珍しい魂なのだ」
俺と都雅、勇気はそれぞれ顔を見合わせる。

「珍しい魂？」

「そなたの魂は魂玉に入ると、歌を歌うのだ。他の魂玉は音を奏でるが、歌いはしない」

「何だ…それ」

「僕たちも最近まで詳しいことが分からなかつたのですが、ラゴ様が協力してくださる事になつて分かつた事なんです」

「われわれコレクターにしか分からぬ氣配だから、大抵はコレクター同士の争いで終わる。が、今度はそつは行かなかつたようだな。そなたの身体と魂の交換が条件だらう。だが、魂が逃げた」
俺は、自分が空中にフワフワと浮いていた時のことを思い出した。
「危険を察知したのではないでしょうか？ それで身体から無理やり離された魂は、魂玉に入れられる前に逃げた…」

青空がそう言いながらも首をかしげる。

「でも…どうやって逃げたのでしょうか…」

ラゴ様を見上げた青空は、笑つているラゴ様を見て目を瞬かせた。
「もしかして…ご存知なのですか？」

ラゴ様は笑いながら頷く。

「何しろ、最初に見つけたのは私だつたのだからね

「……え？」

全員がラゴ様を見つめる中、都雅が、「と、言う事は少なくとも五百年は生きている…という事か」と呟いた。

「まあ…私のことは置いておいて」

「五百年に一度…という事を分かつてゐるといつことは、ラゴ様が

見つけられる前にもあつたと言つ事ではないのですか？」

「うむ。確かにめずらしい魂がいる… というのは書物にも残つてゐる。だが、コレクターが見つける前に来迎部が向かえ、祝部によつて新しく生まれ変わつてしまつていた。私が見つけるまでは誰も魂玉に入れた事はなかつたのだ」

青空が慌てた様に、どこに隠していたのかノートパソコンを取り出して開いた。しばらく力チャ力チャとキーを打つていたが、目的の物が見つかつたのか手が止まつた。

「ああ。これですね。……確かに五百年」と現れている… 虹色の魂？」

「虹色が珍しいってことは、普通はそんな色じやないのか？」

「ええ。それぞれ色は違いますけど… 虹色といふのは無いですね。僕も見たこと無いです… あれ？… でも彼を助けた時は虹色じやありませんでしたよ… ラ「ゴ様」

ベッドの上で丸くなつていた大治郎も顔を上げて頷いた。

「おいらも見たけど、虹色じやなかつたなあ…」

「そこがこの魂… 私は“こよなし”と呼んでいるが… の不思議なところだ。気配を消すのだよ… それと共に色が無くなる。彼を見つけて時、オーラが無かつたであろう？ 普通の魂ならば光つているはずなのに」

青空と大治郎は顔を見合せた。

「黒いオーラだつたわけではないのですね？」

「深夜だつたために気づかなかつたのであるう。虹色ならば、他のコレクターに見つかっていてもおかしくは無いのだから。青空が見つけたのは何故だ？」

「他の魂を探索した帰りでした。偶然、空中に浮遊している魂を大治郎が発見しまして… 玉繭（たまゆ） 黄泉の国をまとめている組織名）と連絡を取ると、まだ器が生きているとの報告と器が行方不明との報告を受け取りました。それで最初は気を探したのですが、どうしても途中でわからなくなつてしまつたんです」

「つまり、大治郎や青空が発見しなければ、他のコレクターに拾われていた可能性があると言つことだ」

話の展開が早すぎて理解できない。

青空は難しそうな顔をして、うつむいた。

「それで、どうやって逃げ出すのか…教えていただけますか」

ラゴ様一瞬どうしようかと天井を見上げたが、すぐに青空に視線を戻す。青空も顔を上げてラゴ様を見つめた。

第四十一話

「ラゴ様は短い溜息をつくと、話し始めた。

「気配を消すと言つただろう? 気配を消してしまつ前、一瞬だけ眩い光を放つ。いわゆる目くらましというものだらうね。私が魂玉に入れられたのは、あの時兄妹に話しかけられて違う方向を見ていたためだつた。そうでなければ一人とも目がくらんで逃がしていただろうね」

今回はそれで逃げられたということなんだろうか。

「しかし…今回で他のコレクターにも知れ渡る。次は無いだらう」

ラゴ様は本当に残念そうにため息をついた。

しばらくの沈黙のあと、青空が目頭を押さえながら口を開いた。

「いくら玉蘭に属さないコレクターでも、人間とコンタクトを取ることはしてはならないと分かつているはずなのに…」

「え…僕たちは…いいんですか?」

「三刀屋さん達の場合は特別なんです。我々は普通、姿を隠していなければならぬんですよ」

確かにコンタクトを取りすぎで、この世とあの世がくつつくと面倒な事になりそうだ。

青空は小さくため息をついて顔を上げた。

「コレクターは魂を無理やり取り出す事ができないので、人間に魂を取り出してもらう代わりに、その器は人間に渡す…と協定を結んだのですね…きっと」

そいつらにとつて、俺の魂も身体も物同然といふことか。

「ずいぶんな扱いだな」

俺の目が怒りに燃えているのを見て、ラゴ様は小さく笑つた。

「尊厳を主張するかね? だが、そのためには身体を見つけなくてはならない」

「このままでは、気の糸が切られてしまうのではないかと、心配で

す

青空の吐息が震える。

「まあ…それは大丈夫だから安心しなさい。青空」

ラゴ様は何でもない…といった風にヒラヒラと手を振った。

「どうして大丈夫だつて、分かるんですか？」

都雅がこれまた深刻そうな雰囲気もなく、茶のみ話のよつに気楽に尋ねる。

「ふむ。そなたも変わつた魂だの。どうだ？死した後は私のものにならぬいかね？」

「ラゴ様…！」

青空は勢いよく立ち上がつた。

「分かつてある、青空。だが、急いては事を仕損じると言つではないか。落ち着きなさい」

右手で顔を覆つて、青空は落ちるように座る。

ちょっとだけ青空に同情するよ。俺的にはラゴ様つて上司に持ちたくないタイプだ。

「あの砂時計の魂玉が全て落ちてしまつまでは切れないだろ？から大丈夫だ。そういうところだけはきつちりと守るのが『レクターだからね』

根本的なルールを守れよ…と言いたい。

「生贊の場合はどうですか？肉体が死んでしまつたら切れてしまうのでは？」

都雅が小首を傾げて言った。

「生贊にしろ何にしろ、あの砂時計の時間は守られる。だが、生贊が一番厄介だろ？ね。新器と依り代ならば、魂は違うが身体は一応生きている。生贊はそうはいかない…が。私は生贊ではないと推測する」

全員がラゴ様に注目する。

「どういうことですか？」

「何に捧げるか…によるが、少なくとも私の知つてゐる生贊の儀式

といつのは器と魂両方を捧げるものだからだ。今回の場合、魂は離脱させられている。もちろんこの考えは推測であって百パーセントではない。それゆえ… 言つのをためらっていたのだが…

ふと横を見ると、勇気が一生懸命理解しようとしている様に見えた。

「勇気。オーバーヒートしないように『気をつけろよ』

「え？ あ、うん。えっと… 質問… いいですか？」

ラゴ様と青空の顔を交互に見ながら勇気がそつそつと、一人は頷いた。

「依り代にするなら、盗むまでもなくても良じような気がするんです。もちろん、何らかの危険があるのかも知れないんですけど… でも、変な言い方すると、誤魔化して説得すれば、盗まなくとも済むでしょう？」

「一理ある…と言いたいところだが、それならば三つとも誤魔化して説得できる。そもそも忘れていいのかね？ 本来ならば、すでに魂玉に入っているはずなのだ。そうすれば、器は空になる。それを持つていった…と言つ事だ」

「ああ… そうか…」

勇気はため息まじりに言つて、目を閉じた。

「身体を見つける事も重要だが、見つけた時にどうやって奪還するか… という課題も残つていて。あちらも、それを阻止しようとするとどうからね」

「コレクターが複数いることを考へると…」

青空は深くため息をついた。

ラゴ様みたいな奴が複数いると思つと… 僕もため息が出る。

「そなたがあの校舎へ通つようになるまでに、何か策を考えなくては」

ラゴ様が楽しそうに言つた。

効果音を付けると… そつ「ウキウキ」といつた感じだ（効果音じゃないか…？）。

「それまでに、何か俺がやっておく事つてないのか?」「…

「特にありません。新学期になるまでは、あの校舎に近付かないで

下さいね」

「ダメなの?」「…

勇気がそう聞くと、青空は小さく微笑んだ。

「八潮路さんと鳶沢さんは結構です。そうですね…春休みの間に偵察に行つていただけますか?」「…

「いいよ」

「僕、がんばります」

二人は頷く。

「ちょっと。えつ。俺は?」「…

ラゴ様がフフフと笑つて俺の両肩に手を乗せた。何か意味ありげ。何か重要な事でも?…

第四十一話

「自宅待機しかない」

がつくり…。

俺は立ち上がると「ぐあーっ」と叫びながら、都雅のベッドにダイブした。

大治郎がつぶされないようにとピヨンと飛んだ。身体が何度も跳ねた後、俺は身体から力を抜く。

「俺にすることは無いのかよ」

「そうだ。校舎は勇氣に行つてもらおう。先輩から変わった事なんかを教えてもらえるだろ?」

都雅がそう言つたので、俺は身体を起こした。

「んで、その間。俺達は何してるんだよ?」

都雅はにこりと笑う。

「勉強」

「……は?」

「べ・ん・きょ・う」

「いや……スタッフカートつけて言わなくとも分かるけど……えつ……。学校の?」

「違う違う。コレクター や魂の事について……だよ。勇氣には後で説明する事にして、分担した方が良いと思つ。本当はオレも別な事をした方が良いとは思つねど、要をほっとくと向をするか分からぬし」

まあ……短時間で俺のことをよくわかつていらつしゃる。

「一人で憶えたほうが、勇氣に補足しやすいだろ?」

「確かに」

俺が頷くと、都雅は勇氣の方を振り向く。

「一人で校舎に行く事になるけど。構わない?」

「う、うん。大丈夫だよ」

右手の拳をギュッと握つて、勇気は一度頷いた。

「そうしてもらえると助かるなあ。おいらと同じような仕事をしている仲間が、帰つて来ないんじや迂闊に入れないって青空が言つからさ」

「ぼ、僕が入つても大丈夫だよね」

「おつ、心配かい？ やっぱりここはおいらの出番かな」

ベッドを俺に占領されて、床に降りていた大治郎がそう言つと、

青空が大治郎の首の後ろ辺りを持ち上げる。

「大治郎。だめだつて言つたろう？」

「えー。おいらは行つてみたいんだけど……なあ」

上目遣いで青空に言つた大治郎は、厳しい顔の青空を見て視線を逸らした。

「青空は怒ると怖いから……やめる」

俺は思わず吹き出してしまい、それにつられたかの様に都雅や勇気も笑つた。

「大治郎はすぐに危険な場所に行きたがるんだから」

「義侠心だよ義侠心」

「違うでしょ。そういうのを無謀つて言つんだよ」

青空は大治郎の顔を自分の方に向けると、怖い顔をして見せた。

「……分かつてるよ……分かつてるつてば。ちょっと……言つてみただけじゃないかあ」

「青空。もうそれくらいで許してあげなさい」

そう言つてラゴ様は大治郎を抱き上げた。

仕方なさそうに手を離した青空は、ため息をつく。

「へへへ…ありがとうございます、ラゴ様」

「大治郎も少しば重しなさい」

ラゴ様の膝の上でしゃーんとうつむいた大治郎は、猫らしく一やーんと鳴いた。

「他に質問はありますか？」

青空が俺たちの顔をそれぞれ見ながら言つと、勇気が学校でもな

いのに小さく手を上げた。

「あの、『氣』のこと教えてもらえませんか」

「そうだった。俺もそれ聞きたい」

「分かりました」

『氣』が身体と魂をつなぐ糸のようなものだと言つ事は憶えている。でも、見えなくなつたのに俺が死んでいない理由が分からぬ。「我々が器と呼ぶ人間の肉体と魂とを繋ぐ細い金色の糸のことです。その糸が切れた時、初めて死んだということになります。この糸は細いとはいえ簡単に切れるものではありません。ただし、寿命が来た時と器が機能を停止した場合は自然に切れます。切れると言うか、離れるのです。器と糸がまるで同じ磁極になつたかのように弾かれて離れます」

「寿命がきていない時の糸はハサミを使えば切れる……などという代物ではないのだよ」

ラゴ様は左手の人差し指と中指をハサミに見立てて、動かして見せた。

「切られていないのに、見えないとなると……多分、解されてしまつたのだと思います。」

「ほぐされた?」

「「」の糸は沢山の集合が縫られたものなので、その全てが切られないと限り、糸が切られたことにはならないのです。一本だけでも繋がつていれば、生きている。切れた場合は魂に巻きついて次第に色をなくしていきます。三刀屋さんを見る限り、糸は巻きついてないので、まだ繋がっています。その繋がっている糸を伝つて見つけられた者が、解してばらばらにしたのでしょうか？」

「解されて見えないのに、巻きついていないの分かるの？」

都雅がすかさず言つと、青空は都雅に向かつて頷いた。

「糸は自分で縫る性質を持つています。解されても自分でもとに戻るはずなのですが、今回の場合は多分何かで一本一本を抑えているのでしょう？」

「そこに、コレクターが関わつてくるのだろうね。沢山のコレクターがその一本一本を掘まえているのではないかな？」

ラゴ様が自分の金色の髪を、まるで気の糸のように指でつまみ上げる。

「そうすると、細すぎて見えなくなります。警えると蜘蛛の糸のよ
うな感じでしょうか？」

俺たち三人は頷いた。

蜘蛛の糸と言われば、何となく分かる。

「それじゃ、俺の魂についた氣を「」…糸を手繰るようにしていけば、見つかるんじゃないのか？」

俺はラゴ様の髪を引っ張つてそう言つた。いや、引っ張つたつもりだったけど、ラゴ様の頭は微動だにしなかった。

「あれ？」

ラゴ様は小さく笑う。

俺の指には何も挟まつてはいなかつた。

「あれれ…」

「そこに色々複雑な問題が絡んでくるのだよ」

「複雑な問題つて？」

「まず解されてしまふと、殆どの者には見えないし。見えても止まつているわけではないので見失いややすい。さらに本人以外では触れられないものなのだ」

都雅が眉を寄せて首を傾げた。

「矛盾が発生しない？ 本人しか触れられないのに、何故解されたりコレクターが押さえていられたりするの」

「たつた一つだけ例外があるのでよ」

ラゴ様は右手の人差し指を俺たちに見せるように突き出した。

「例外？」

「そう。 血だ」

「血…？」

「血つて…俺の？」

「そうです。三刀屋さん本人の血で掴む事が出来るのです。ですが、我々は器を傷つける事は出来ません」

「ああ…それで人間と協力せざるを得ないってことなんだ…」

都雅が呟くと、青空は目を閉じながら頷いた。

「今回は人間も器を必要としているため、速やかに協定が結ばれたのでしよう」

「待つてください。本人は掴む事が出来るなら、要くんが自分で掴みながら探せるんじやないですか？」

勇気がパツと明るい顔になつて言つたが、ラゴ様も青空も、ついでに大治郎も首を横に振つた。

「大事な事を忘れてる。残念ながら、彼は糸が見えない」

「見えていないため、触れている事に気づかないのです」

二人の言葉に、俺と勇気はがっくりと肩を落とした。

「それじゃあさ。俺だと見つけられるかもしぬないって言つた理由は？」

「第六感…です」

「だいろいろかん…？ つて何？」

「人間が感じる感覚、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感があります。そのどれでもない。所謂、勘といつものです」

勘に頼れと？

半分呆れて、俺は口を開け放しだった。

「勘をバカにしてはいけない。多くの雑多な情報を排除すれば、自分の器が近くにあるかどうか分かるはずだ」

「雑多な情報…？」

「あの…」

大治郎がラゴ様の腕の中で、遮るよ^{ハスカ}うに言ったので全員が大治郎に注目した。

「どうしたの？ 大治郎」

「ひとつ。おもいついだんだけど

「うん」

「そここの坊や使えないかなあ？」

「坊や？」

大治郎の視線は勇氣の方を向いていた。

「…ぼ、僕？」

「かなり耳が良いんだよね。もしかしたら…、聞こえるかも知れないよ

ラゴ様と青空は顔を見合させる。

「本当？」

「だつてかなり騒がしかった上に、離れた場所で囁いたおいらの声を、聞き取つたくらいだからさ」

「何だと？」

「それは…可能性があるかもしませんね」

「ちょっと、二人と一匹で話を進めないでくれないか」

俺が声をかけると、はつとしたようにこちらを向いた。

「何が聞こえるっていうのか説明してくれ

「すいません…えっと」

「その説明は私がしよう。前に魂は音を奏でると書いたのを覚えているかな？」

「ああ、ええ。はい」

「そう。魂は音を奏でる。それはもちろん魂玉に入った時なのだが、それに共鳴するように、微弱ながら器も音を出しているのだよ。確かに聞こえるのだ。耳鳴りの音に近いがね」

「……は？」

「同じ音は一つとしてないといわれている。つまり、その音を聞き、覚えることができれば、見つける確立が高くなるというわけだね」頭がグルグルしてきたぞ。
意味がわからぬ。

「キーンといつ音ですか？」

勇気が確信に似た瞳でラゴ様を見つめる。

「そり、それに近い。…聞こえるのだね？」

勇気は頷いた。

「小さい頃から、聞こえました。病院に行つても原因不明で、直らなかつたんです。ただ、聞こえるのは本当に小さな音で、日常生活にはそんなに支障がなかつたし、時々だつたので。そのままにしてましたけど」

俺は驚いて勇氣の顔をしげしげと見つめてしまった。

「それは、魂と器どちらかの音だらうね。御互いに呼び合ひよひよひ鳴るのだ」

「と、言つ事は。この音が聞こえる時つて、肉体から離れた魂があるときつてことですか？」

「そうだね。意外に器から気づかないうちに魂が抜けている人が多いのだ。夢を見ていると思つてゐるだらうが」

まさに幽体離脱ゆうたいりだつつてことか。

「さて、そろそろ私は帰るとしよう。青空はどうするね？」

「ええと…玉蘭たまらんに報告する事もあるので、僕も帰ることにします。

ほら行くよ大治郎」

「いや？ 連絡の仕方を教えないのかい？」

青空はうつかりしていたらしく「ああ！」と大きな声で言つた後、声を出してしまつた事に自分で驚いていた。

「すいません。ええと…これ。渡しておきます」

青空が俺にくれた物は、ホイッスルだつた。銀メッキのやつ。俺は思いつきり吹いてみた。

ピーッと音がするかと思ひきや、何の音もしない。その代わりに

大治郎が飛び上がつた。

「そんなに吹かなくても聞こえてらあ…」

「え？」

「それは大治郎を呼ぶ笛なんです。小さく吹いても聞こえますから」

「そなんだ」

「ああ…びっくりした。今度は静かに吹いとくれよ」

大治郎は身体をブルルと震わせる。

「ごめんごめん」

都雅が俺の手からホイッスルを受け取つて、じっと眺めた。

「犬笛とは違うんだね」

「そうですね。大治郎だけに聞こえる…と言つと大きさになるかも
しないんですけど。他の動物達にも聞こえるのですが、自分を呼んで
いる音では無いと分かるんです」

「へえ」

三人でその笛を眺めていると、窓を開ける音がした。

「それでは失礼するよ」

ラゴ様が先に窓から出て行く。

まるで透明な屋根に乗つてゐるかのように、空中に立つていた。

「情報が入り次第、こちらからも連絡しますね。それでは失礼します」

す

青空は以前、病院で見たように大治郎の尻尾に掴まつた。

大治郎がふわりと浮くと同時に、青空の身体も一緒に浮き上がつていく。

窓から一人と一匹が上空に消えてゆくのを見ていた俺たちは、首が痛くなつて見上げるのを止めた。

そして窓を閉めた途端に、俺は今頃思い出したのだった。

「あつ！」

「なつ…何？」

「文句言ひの忘れてた」

学年のことときちんと説明してくれなかつた事を、言おうとしていたのを忘れていた。

「青空さんだつて、忙しいんだよ。許してあげたら？」

勇気の言葉に俺は深いため息をついて、頷いた。

仕方ない。

今回だけは許そつ。

第四十五話

「春休みに入つたら、勇氣は学校へ潜入だろ。俺は勉強…ううん、つまらない」

「そういう問題じゃないでしょ」

都雅が苦笑して俺にクッショーンを軽く投げてきた。

「そんなに、つまらないなら楽しいことじょうか?」

「楽しいこと! ? 何だそれ!」

俺がわくわくしてクッショーンを投げ返すと、すぐに都雅も投げ返してきて、にっこりと悪魔の微笑み。

「学校の勉強」

俺はクッショーンを抱きしめたままベッドへと倒れこんだ。

「勉強が、楽しいことかよ」

「楽しいでしょ。問題解けると」

なるほど、頭の良いやつはこいつしてできるわけだ。

俺がベッドの上に唸つていると、勇氣が隣で小さく笑つた。

「どうした?」

「だつて、要くん。犬みたいに唸るんだもん」

「俺は昔から勉強は嫌いなんだよ」

「昔からつていつから?」

「え…」

俺は思い起こせる昔を、思い出そうと記憶をたどつたが出てこなかつた。出てこないどころか、ひとつも何も思い出せない。

「……あれ? これって記憶喪失?」

「え? だつて以前20代だつて言つてなかつた?」

「おうよ」

「20何歳?」

「……」

確か後半だつた…はず。と思ったがそれも確かではなかつた。名

前とあやふやな年齢しか覚えていないのだ。

「この町に来たことがないのは確かにはずだけど、実際何処に住んでたかは覚えてない……」

俺がそういうと、都雅の目が細められた。

「それは、『レクター』に記憶を奪われたのかもしないね」

「……、記憶をコレクションするって言つてたもんね」「おじおじ、それじゃあ俺の記憶は戻らないのかよ。

がつくつと肩を落としていると、めずらしく勇気が声を張り上げた。

「でもやー取り返せばいこんでしじゅー、身体も記憶も取り戻そうよーねー！」

「……おー」

俺は起き上がりつゝ、勇気の頭に手を載せて髪の毛をグシャグシャとかきまわした。

「うわあ、やめてよ!」「

「いいじやん、いいじやん。せははは、サンキューな勇気」

「え? うわあ、やめてよー要くん!」

向かいにいた都雅が首をかしげているのが目に入つて、俺が手を止める

止めると、その隙に勇気に逃げられる。

「どうした、都雅」

「いや、随分と簡単に言つたと思つて」

勇気の肩がビクッと震えた。一瞬にして顔がこわばる。

「勇気は俺を元気付けよつとして言つてくれてんだからね。今のところはいいんじゃないの?これから色々問題はでてくるだらうけど。俺がこのまま意氣消沈してゐよつはマシだらが

そうこうと、都雅はにっこりと笑つた。

少しへキッとする笑い方だった。

「なるほどね、了解。そういう言い方もあるってことか」「

「……もしかして今まで誰かを元気付けたことない……とか」

「ん~、どうだらうね」

「……それで、良く彼女できたな

「懐の広い彼女なんですね」

ふふふと意味ありげに都雅は笑つた。

「あ! やっぱ、年上だろ!」

「残念、はずれ」

「え~?」

「勇気は知つてゐるのか?」

ビクッとなつた勇気だが、都雅が笑つてゐるのでホッとした

ようだつた。すぐに頬を緩めて微笑む。

「えつとね、詳しく述べ知らないんだけど、一緒に歩いていふところを見たことがあるよ。あれは多分、近くの公立の制服だと思つ

「ほあ…ってことは年下?」

俺がにやりと笑つて見せると、都雅は苦笑して肩をすくめる。

「極端なものの考え方は、後々困ることになるよ。ちなみに、同級生…ん、学校が違うから同じ年の方が正解かな?」

「へえ…同じ年ね。意外。でもさ、俺のことにつき込まれたら会えないんじゃないのか?」

都雅は少し口の端をあげて笑つ。

「まあね。でも、説明するから。友達を救うためだつてね」

「へえ。文句いわないのか」

「さつとき言つたろう? 懐の深い女の子なんだよ」

「ほほう、興味がありますな」

俺がさつ言つて、都雅の顔を見ると一瞬、目が光つたように見えた。

「いざれ会えるよ。でもね船迫 要くん。手を出せつと思わないことだよ」

と、につこり…。

俺と勇氣絶句。

こえええ。

今のは今までの中で一番怖い微笑み。

絶対、何もしませんと心に誓つた俺だった(たぶん勇氣も、そう思つたに違ひない)。

「そ、せんと。俺もそろそろ帰るかな。お袋心配するだらうし」「そうだね。僕も一緒に帰るよ」

勇気が俺の鞄を持って渡してくれる。

ほんと、勇気って気が利くやつ。

部屋を出て階段を下りると、すでに古文さんはおらず、マナちゃんがソファに座って雑誌を読んでいた。

「あら、もうお帰り?」

「はい、お邪魔しました」

勇気がぺこりと頭をさげると、マナちゃんは残念そうに溜息をついた。

「ちつとも邪魔じゃないのよ、もつとこてくれてもいいのに」「

「はいはい、マナちゃん、わがまま言わないで」

都雅が苦笑しながら母親をなだめる姿は（悪いが）面白い。玄関に出て靴を履き、勇氣と一緒に外へとでた。

「また遊びにきてよ。マナちゃんも喜ぶからさ」

「おう、また来るよ」

「絶対絶対来るよー」

勇気は満面の笑みでやう答えた。

「うんうん、愛いこやつ。素直でいいねえ。

などと思つてみると、思つたことが顔に出たのか、都雅に笑われてしまつた（勇気のことを言つてられないか）

「電話しなくていいの?..」

歩きながらかけるよ。近くに公園あつただろ、そこに迎えに来てもりうからせ」

「やつ、それじゃ、またね」

玄関の扉の後ろからマナちゃんが寂しそうに顔を覗かせてくる。

「また、来ます」

「ええ、絶対来てね！ 待ってるから」

まるで、俺たちが友達のよう^に、そつ^と言つてマナちゃんは都雅よりも柔らかい微笑を見せてくれた。

これで都雅の母親だつていうんだから、驚きだ。姉だつて言つても通じるだろう。

オホンと都雅がわざとらしく咳をしたので、俺は慌てて歩き出した。

「そ、それじゃまたな～」

「またね」

勇気と一緒に手を振つて、都雅の家をあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6782c/>

冷たい炎と月鏡

2011年4月27日00時25分発行